

令和元(2019)年度

市立函館博物館 研究紀要

第30号

- | | | |
|----------|-------------------|--------|
| 千田 晃平・則子 | 中島登「戦友姿絵」について | - 1 - |
| 山口 精次 | 復禄請願から見た旧館藩士の秩禄処分 | - 12 - |
| 奥野 進 | アイヌ絵粉本考 | - 25 - |

中島登「戦友姿絵」について

千田 晃平・則子

中島登「戦友姿絵」

現在、市立函館博物館が所蔵する「戦友姿絵」と呼ばれる本資料は、旧題が「幕末新選組記念巻」「新選組姿絵集」とされた資料で、新選組隊士の中島登が箱館戦争後に近藤勇や土方歳三、亡くなった新選組隊士ら31人を主として描いた絵巻である。主題となる隊士図の前に「序文」「開陽丸」1図、末尾には「アイヌ」1図が含まれており、巻物に仕立てられている。一図ごとに紙の横巾が微妙に異り、元は一枚絵だったものを貼り合わせたもので、綴じられた跡もない。

同館によれば発見された経緯は不明とのこと、筆者はあらためて中島の子孫にも問い合わせてみたが、登が移り住んで以降、浜松の住居が三度の火災にあったこともあり、元の枚数は不明だという。「序文」の文面は家族宛でないことから、「これが本人の書ならば」将来、何らかの形で不特定多数に発表する意図があったのではないかと考えられる。

本資料の作者である中島登(1838～1887)は、天保9年(1838)2月2日、八王子小田野(現、西寺方町)に生まれ、同じ八王子出身の新選組隊士には、近藤勇、土方歳三、横倉甚五郎らがいた。安政3年(1856)、19歳で天然理心流・山本満次郎の門下に入り、翌年に結婚、長男が生まれている。八王子千人同心であったが、元治元年(1864)、27歳の頃、新選組に入隊し、武州・甲府・相模の探索方として活動したといわれている。鳥羽伏見の戦いの前に新選組本隊に合流し、甲府、流山、宇都宮、会津、箱館と

転戦の後、箱館の弁天台場で降伏した。明治2年(1869)、時に中島は31歳であった。

降伏後、恭順した隊士らは箱館戦争に関する記録「箱館戦争資料」を残したが、中島も「覚書」「隊士名簿」、そして今回のテーマである「戦友姿絵」などを残した。

(函館博物館に資料を寄贈した)中島のご子孫の方に、中島登の遺品に絵の道具やスケッチ、姿絵の下絵、反故紙などがなか尋ねてみたが、「見たことはない」「あっても火事で燃えたのだろう」とのことで、絵画関係資料については、「戦友姿絵」以外には「函館湾戦闘略図」と「葉蘭の絵」(明治15年)を所蔵するのみであった。

「箱館湾略戦闘図」は、明治2年(1869)5月11日、蟠竜が朝陽を沈める場面であることは記されているが、制作時期は不明である。また、「葉蘭の絵」は、明治14年(1881)に出来た葉蘭(ハラン)の新種の「金玉廉」の絵で、明治15年に再婚したお祝いだと思われる。中島の絵とする意見もある



箱館湾戦闘略図



「葉蘭の絵」

が、絵に書かれた署名「雲荘」より、椿椿山の弟子で遠江の三方原に住んだ「望月雲荘」（1832～1896）の作だと思われる。三方原は、中島が居た浜松市中区紺屋町より7、8 kmの距離である。

箱館戦争の資料に人物絵はほとんど見られないが、近年、「麦叢録」を残した小杉雅之進のイラスト（「麦叢録附図」東京農業大学図書館所蔵）が発見され話題になった。「戦友姿絵」では、あれだけ隊士らの姿を描いた中島が、その他の絵はアイヌの図と開陽、略図しか遺していない。浜松での十数年の生活で、何も描きたいものはなかったのだろうか。

箱館戦争資料

中島は、箱館戦争後、弁天台場に收容された後、青森に移され、明治2年（1869）6月9日（旧暦）弘前藩へ、7月21日（旧暦）青森へ、さらに10月24日（旧暦）には再び弁天台場に戻され約5ヶ月謹慎した。その後、明治3年（1870）5月上旬、静岡藩お預けになり、中旬には赦免され、多摩に帰還している。

中島と同様に、旧幕府脱走軍の兵士たちも一年近く、青森や弘前の寺、弁天台場に收容されたが、その間、互いに資料を貸し

借りして、「箱館戦争資料」を作成した。

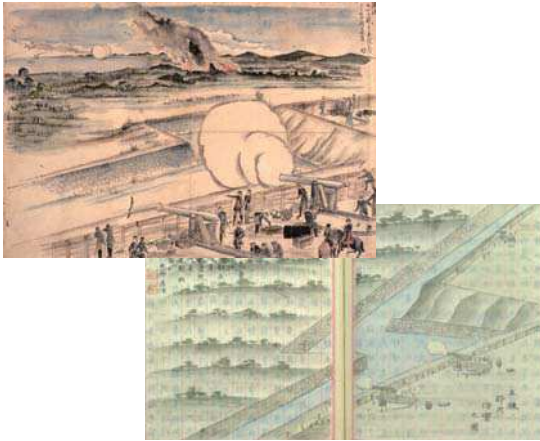
岡崎藩士・玉置弥五左衛門（五郎）は戦争記「南蝦夷戦争記」を書き残したが、その後書きで、『此書ハ津軽ニ恭順中東京品海ヨリ蝦夷地へ至ル迄ノ日記ヲ見聞セシナカーニテ探り加之小杉俗名雅之進室田俗名秀雄盛札ノ記録ヲ校入シ不審ナルハ彼レニ問ヒ之ニ聞キ糺之ハ雖モ遺漏尤多カルベシ素ヨリ他見ノ為ナラズ聊カ子孫ニ書遺シ置ンス欲スル為己矣右之書明治ニ己歳在九月青森蓮心寺ニテ日之立某ヨリ借寫』と、本書は青森蓮心寺で小杉雅之進と室田秀雄の記録を写した、といている。小杉雅之進は咸臨丸に乗った幕臣で、「室田秀雄」については不明である。

玉置は、別の著書「遊撃隊起終録」で、上巻20図、下巻18図の戦艦を描いているが、同じような戦艦や箱館戦争の図は、フランス軍士官ブリュネ・同士官コラッシュ（スケッチ）、仙台藩士荒井宜行（「蝦夷錦」）、

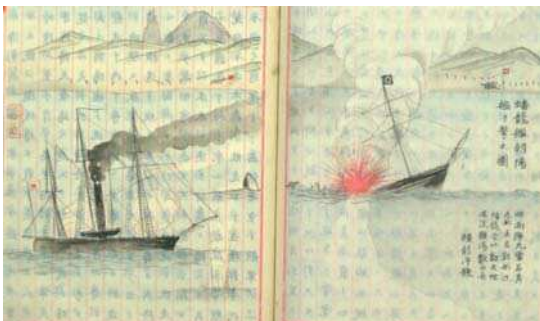
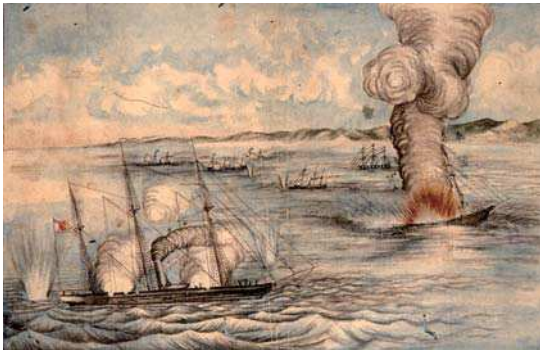


「戦友姿絵」開陽艦蝦夷渡海之図（上）と「遊撃隊起終南蝦夷戦争記附録戦地写生図」徳川軍艦開陽艦（下）





「麦叢録附図」五稜郭より発砲応援之図（上、東京農業大学蔵）と「蝦夷錦」五稜郭内防禦之図（下、函館市中央図書館蔵）



「麦叢録附図」（上、東京農業大学蔵）と「函館戦争図絵」蟠龍艦ヨリ発射スル砲弾朝陽艦火薬庫的中忽ち沈没乗組人員八十余人ノ内百五十余人死没スルノ図（中）、「蝦夷錦」蟠龍艦朝陽艦ヲ撃之図（下）（中・下は函館市中央図書館蔵）

小杉雅之進（「麦叢録附図」、玉置弥五左衛門（「遊撃隊起終並南蝦夷戦争記付図」、岩橋教章（「函館戦争日記」「函館戦争図絵」、中島登（「函館湾略図」「開陽艦の図」）ほか数人も描いており、皆が何らかの共通の資料を見ていた可能性が高い。

写したとはいっても、丸写しではなく、言葉は変えている。例えば、書き出しを比べてみると「麦叢録」では、「慶應四歳次戊辰ノ春正月我前大將軍上洛ノ際前軀開門通行ノ事ヨリ争鬭ヲ開キ遂ニ錦旗へ発砲ナシ朝敵顕然タルニヨリ官爵ヲ停止セラレ同三月征討師ヲ以テ三道ヨリ江戸城へ進軍セラルルノ旨……」となっているが、「遊撃隊起終録・南蝦夷戦争記」では、「頃ハ慶應四年三月上旬征東將軍有栖川宮既ニ京師ヲ発シタルト聞江都ノ士民同様口方ナラスト雖モ大君既ニ御恭順被遊候ニ付東海道ノ諸侯ハ無……」となっている。

中島登の「覚書」や、島田魁の日記なども、同様のすり合わせがあったのかもしれない。

中島や小杉、玉置ら以外で、恭順中に絵を描いた人物がもう一人いる。武州多摩郡堀之内出身の横倉甚五郎である。横倉は、明治2年(1869)7月21日～9月、蓮華寺で作成した日記控、同志名簿、箱館海戦図、多数の彩色イラスト、自画像、対坐する近藤・土方ほかの記録を残している。近藤図は、髪型こそ違えど「毛氈のような座布団の上で、右手で閉じた鉄扇を立てている」様子が、中島氏の戦友絵姿の近藤図に似ているという⁽¹⁾。すでに述べたとおり、旧幕府脱走軍の兵士らは、覚書や名簿について、かなり情報交換をし、それを資料に活かしていた。横倉の作品に接したことが、中島に創作意欲を沸かせた可能性もあるだろう。

横倉は、鳥羽伏見の戦い以降、甲州、会

津、仙台、箱館と転戦しており、ほぼ中島と同ルートをとったと思われる。降伏も同じ弁天台場で明治2年（1869）5月15日（旧暦）である。

中島は明治2年9月24日（旧暦）、青森蓮華寺で2ヶ月の間に書いた「覚書」や「手紙」の類を実家に送っている。この中に姿絵はまだなかった。一か月後の10月24日（旧暦）、再び弁天台場に戻された。

一方、横倉甚五郎は、「11月9日昨夜今井信郎横倉甚五郎箱館ヨリ着右兩人ハ神木隊杜陵隊岡崎唐津桑名其外藩士都合百六十四人十一月四日箱館出帆同七日夜着兩人ヨリ外ノ者ハ芝増上寺ニテ謹慎ス今井留別諸友外二人當春已来京坂ニ至リ潜伏セシカ捕ヘラレテ土州人ト同道シテ下リ今日入牢セリ」⁽²⁾と、今井信郎とともに坂本龍馬、伊東甲子太郎兩名暗殺の嫌疑により、11月8日夜に東京の糾問所へ移された。

その前に中島は横倉から、書類一式を預かっている。横倉が何故、中島のように9月中に書類一式を実家に送らなかったかは不明である。

中島らは、明治3年（1870）4月10日頃、静岡藩預かりとなり弁天台場を出立、5月、静岡に到着したが、横倉甚五郎は、約3か月後の8月15日、東京で牢死した。享年37歳であった。その間、ずっと取り調べを受けていたのかと思うとやりきれない。

後日、訃報を受けた中島は横倉の実家を訪ね、実兄に預かった書類一式を渡した。

なお、「戦友姿絵」に含まれる「アイヌ」図については、函館博物館の奥野進氏が、遊撃隊士玉置弥五左衛門の「遊撃隊起終録并南蝦夷戦争記附録戦地写生図」にも、そっくり同じ構図の「蝦夷人」図があることを紹介している⁽³⁾。アイヌの2図を比較すると、男性の着物の縁の色が青と黒で異なること、「夫・婦・息子」や「蝦夷人」の

文字が玉置図にはあるが、中島図にはないことなど細部の違いはあるが、女性と子供の足の位置、全体の構図は全く同じであり、同じ原資料から互いに写したものと思われる。同氏によれば、本図のとくに左の女性と子供と同じ構図の図が、林子平「三国通覧図説」に描かれており、函館博物館の中島登関係資料には、「三国通覧図説」の付図である「蝦夷国全図」などの付図も含まれている。

「戦友姿絵」の制作と恭順生活

「戦友姿絵」に日付の記述はない。明治2年（1869）9月24日に自宅に送った資料の中に「戦友姿絵」がなかったことから、これ以降の作であり、また、同図の自画像の賛「予忠義宮館弁天台場ニ囚客ト成テ僅ニ寸志ヲ吊ント欲シ死友ノ肖像ヲ画テ后談ノ端ト為ス」から、10月24日に弁天台場に戻ってより、翌年4月までの収容中の作とみられている。

諸説はあるが、作中には、近藤の家紋の間違いのほか、斎藤一たちが如来堂で戦死したとの誤情報がある（これにより、解放後、静岡で過ごして亡くなるまで、斎藤らと交流がなかった事が推測される）。

それでは、中島らの恭順中の生活はどのようなものだったのか。丸毛俊恒「感旧私史」に、弁天台場に再送された旧徳川兵（旧幕府脱走軍）と仙台藩士たちの暮らしぶりが書かれている。日常は「読書、洋書、数学、習字、碁、喋る」と、本や洋書が見れる環境だったことが判る。明治3年（1870）4月以降は「散歩が許され、妓楼も行った」とあり、それまでは出歩けなかったのだろう。

同じ「感旧私史」に「紙」についての記載もある。月にちり紙、煙草のほか「半紙・10枚」の配給あり、と書かれている。他の者も、同じような状況で、この半紙を使

って、覚書や名簿を書いたと思われる。

「戦友姿絵」の個々が描かれた紙のサイズは「縦335mm×横234～238mm」であり、これは半紙サイズ（縦333mm×242mm）である。「序文」と「アイヌ図」は横長だが、同じサイズである。また、玉置の「アイヌ図」は美濃紙、戦艦図は半紙大である。この紙のサイズを比較することで、残された箱館戦争資料の関係性が明らかになる可能性がある。

ただし、解放後も入手できる紙は半紙が主だった可能性は高く、紙の質、ヤケ・シミなど細部を確認していない現在、紙のサイズのみから制作時期を特定するのは難しい状況である。

「戦友姿絵」の描写

以下、「戦友姿絵」の描写について、どのように構成されているのかを具体的に検討したい。

まず、それぞれ人物の服装に着目した結果が、図1（服装別分類、8頁）のとおりである。以後、①戦闘中の姿でないもの（4人）、②戦闘中で西洋式隊服を着用（6人）、③戦闘中で和服姿（19人）、の3つのタイプに分類して検討したい。

①戦闘中の姿でない姿で描かれた4人のうち、唯一、生きていたのは作者である中島登のみである。中島は、中にシャツを着込んだ着物姿で机に向かい「戦友姿絵」を描いている。中島以外の亡くなった近藤勇、三好胖、土方歳三には敬意を表してか、傷や苦痛の表情はなく、袴をつけて武将風に描かれている。②西洋式隊服の6人は、ポーズがほぼ無く、直立姿勢が多く、隊服の描き方もシンプルである。③残る和服姿の19人は、ポーズが変化に富んでおり、着物の柄まで書き込まれている。

実は筆者は、服装の違いで、描画時期を異にしている可能性があり、②が最も初期

に描かれ、その後③、①と描かれたのではないかと考えている。

というのも、③は②と同じ戦闘中なのに、彼らには傷や血が少ない。これは、中島の気持ちの変化を表わしており、③は時間を経て、何かを参考に描いたと思われるからである。

この③のタイプについては、さらにその姿勢に注目して、3つのグループに分けて、検討したい。

③-1は会津で戦死した5人である。この5人は姿勢をすべて変えている。斬りあいは二人だけであり、後は槍を持ったり、旗を持ったり、「戦闘中の姿を描け」といわれても、自然に思いつく姿勢ではない。

③-2は中島や島田魁が、会津の如来堂で戦死したと思っていたが、実際は生きていた13人のうちの8人である。山口（斎藤一）の獅子奮迅ぶりが凄まじい。恐らく中島は存命中に、斎藤の無事を知らなかったのだろう。もし、これが恭順中に描かれたとしても、帰ってから、中島や仲間が如来堂で死ななかったことを知ったら、この絵を残さなかったと思うからである。

姿勢は直立の変化が多く、左の5人は戦闘中、残りの糸部は旗を振り、大砲指図役頭取だった志村は小さく祈っているようだ（片手が胸にある）。山口の図の気合の入れ方から見て、③-1の5人より、こちらが先に描かれた可能性があるのではないだろうか。

③-3の最後の6人は、箱館で戦死した者たちで、姿勢に関していえば最も難易度が高い。詞書きについては、新選組に加入していない甲賀源吾や、中島親子（三郎助・恒太郎・英次郎）、原妹は名前と役しか書いていないのに対して、甲賀と同じ日に没した野村利三郎については文字数がかなり多い。また、千田勘吉と同じく鈴木、吉田、長島も、土方が心配して付けた近藤の

側近だったが、近藤の没後は土方や齋藤の側近となった。

一方これらの③のタイプと異なり、②は菊池と津田以外は傷ついており、頭・胸・足などが赤く染まっている。

絵師の芳年のように、人は目に焼き付いている残酷な物を描くなどして吐き出す事により、心のバランスを保とうとする。つまり、この姿を描いたのは戦争に近い時期といえるのではないか。会津で亡くなった2人は刀のみ、箱館で亡くなった4人は刀と支給されたのか銃を持っている。菊池は、白河口で近藤を見破った男を狙ったが果たせなかった、手には其の男の首か（ならば近藤が見ているのはこの首か）。千田は近藤の側近、小窪（久保）は三好の従者、津田、栗原、乙部は土方と同じ総攻撃の日に台場で亡くなっている。つまり、土方は彼らを助けに向かう途中だったともいえる。この6人は、上の近藤・三好・土方らに関係が深いメンバーを選んだのかもしれない（近藤の元側近は他にもいるが）。

そして、戦闘中の姿ではない①を描いたのは、恐らく一番最後だったのではないだろうか（描き直したか）。中島本人の自画像も、髭、髪のかき方など、かなり身なりが整っていて、背景の棚の様も恭順中の寺とは思えない。

「戦友姿絵」に類似した構図の浮世絵

この描かれた人物の姿勢についてのみ注目して分類したのが図2（姿勢別分類、9頁）である。分類してみると、まず、中島が、表のとおり8パターンをほぼ平均して描き分けていることに驚かされる。これらの姿勢を何も無い所から考えて、構図を決め、下絵を描き、筆入れをして、色を付けることは、絵描きではない者には無理難題であろう。

中島らは弁天台場での恭順中に、読書が

許されていたので、もしや浮世絵・武将の絵本などの資料を見る機会があったのではないか。そう考えて、戦闘ポーズが多い「武者絵」や「赤穂浪士シリーズ」から、時代は中島と同世代の芳虎・芳年を中心に探したところ、その師匠・国芳も含めて幾つか、特に次の6つのシリーズに「姿絵」と類似した構図が複数見つけることができた（直立の隊服図の相似図は、ほぼ無い）。

【シリーズ一覧】（発行年順）

A：「誠忠義士傳」

歌川国芳、弘化4年(1847)

B：「甲越勇将傳」

歌川国芳、弘化4年(1847)

放射線を多用

C：「太平記英勇傳」

一勇齋国芳、嘉永元年(1848)～2年(5年とも) 大判50枚(253×371mm)

D：「忠臣義士銘々傳」芳虎 元治元年(1864) 50枚(180×255mm)

E：「太平記英勇傳」芳幾

慶応3年(1867) 中判100枚

F：「近世義勇伝」歌川芳艶二代

明治7年(1874)

その他

「後風土記英勇傳」

孟齋芳虎、明治7年(1874)

「近世俠義傳」芳年

慶応元年(1865)～2年 大判36枚

など

※ 不思議とA Bと同じ弘化4年の国芳作「忠臣義士高名競」には、1枚も似たポーズが無かった。

上記を中心とする類似する浮世絵をまとめたものが図3（類似浮世絵対照図、10～11頁）である。「戦友姿絵」は確かに姿勢を描き分けてはいるが、国芳の作品に見られる、江戸末期の浮世絵に類似した構図が

多い。それは、歌舞伎絵の姿勢を基本として、浮世絵師が工夫を重ねて作り上げた、凡そ50種類ほどのパターンである（図2の8パターンは、その基本形とも云える）。

一方、国芳の弟子である芳年の、スケッチを取り入れた、明治期のリアルな絵は一つもなかった。もし、彼が「戦友姿絵」制作時に、何かを参考にしたとしても、いわゆる「新浮世絵」は見えていない可能性が高い。

最後に

「姿絵」の賛には「東京」の二文字が繰り返し出てくる。荒井「於東京ニ新選組エ同志シ」、高田「元東京ノ産ニシテ」、河合「東京ヲ脱スル時貫義隊タリ」、粕屋「東京ヲ脱スルヨリ回天隊エ加入シ」。特に、河合の属した貫義隊は、慶應4年閏4月29日、会津へ出発したが、この時江戸はまだ東京にはなっていない。東京と改称したのは7月17日であり、すでに彼らは会津で戦闘のさなかだった。

しかし、恭順中の家族への手紙には「東京の」と何回も書いており、中島には江戸が東京に変わった認識が有ったことが判る（ちなみに、「覚書」で慶應4年の宇都宮に出発する前の事は「江都」と書いており、「東京」は使っていない）。

最後に、中島の「戦友姿絵」と、国芳、芳年、芳虎らの武者絵を比較して、似ていると感じたのは、実は姿勢だけではない。武者絵で多かったのは、「忠臣蔵」の赤穂浪士であることは、既にお気付きだろう。

なぜ当時、これ程多くのシリーズが繰り返し同じ絵師たちによって出版されたのだろうか。

それは、浮世絵師たちも、それを買っていた江戸の人たちも、赤穂浪士に滅びゆく侍たちを重ねていたからではないか。中島が、もしこれらの絵を参考に描いたとした

ら、間違いなく、赤穂浪士のストーリーに、自分たち新選組の末路を重ねたに違いない。

そして、テロ集団として全員切腹させられた赤穂浪士たちが、数百年経っても、人々に愛され、こうして絵の中に生きているように、会津、箱館の露と消えた戦友たちも、人々から忘れ去られないよう、せめて自分が絵に残そうとしたのではないだろうか。

註

- (1)「新選組史料大全」解説
- (2)「維新日乗纂輯第三巻」大島圭介獄中日記 421
- (3)道南ブロック博物館施設等連絡協議会「第6回アドベントカレンダー(9日目)描かれたイメージとしてのアイヌ」<https://dounan.exblog.jp/28156560/>

(歴史研究家)

① 戦闘中の姿でない者

それぞれの情報は、中島が書いた情報を使用し、新選組加入時期は、一般的な情報を参考にした。

新撰組入隊時期
組1…京都まで
組2…江戸に戻って
組3…会津
組4…仙台
組5…箱館

名前 出身 新選組入隊時期
没年・場所 享年



中島登 多摩 組2 箱館戦争生存
近藤勇 多摩農家 組1 慶応4年流山 36歳
三好胖 唐津藩・佐賀 組4 明治元年10月24日七重村 17歳
土方歳三 多摩農家 組1 明治2年5月11日箱館 38歳

② 戦闘中で西洋式隊服



菊地央 弘前藩 組1 慶応4年4月25日白河口 22歳
千田兵衛 弘前藩 組1 明治元年8月21日勝軍山 23歳
小窪清吉 唐津藩 組4 明治元年10月24日七重村 25歳
津田丑五郎 山城 組3 明治2年5月11日弁天台場 25歳
栗原仙之介 唐津藩 組4 明治2年5月11日弁天台場 23歳
乙部剛之進 松山藩、岡山 組4 明治2年5月11日弁天台場 ?歳

③ 戦闘中で和服姿 (1 会津で戦死)



伊藤鉄五郎 山城 組1 慶応4年5月朔日白河口 29歳
鈴木棟三郎 播州 組1 慶応4年8月21日勝軍山 21歳
木下巖 山城 組1 慶応4年8月21日勝軍山 23歳
漢一郎 大阪 組2 慶応4年8月21日勝軍山 31歳
原五郎妹女 会津 慶応4年8月23日か 17歳

(2 会津で戦死したと思っていたが生きていた8人)



山口二郎 徳川臣 組1 明治元年9月4日如来堂 27歳
荒井破摩男 甲州 組1 明治元年9月4日如来堂 26歳
池田七三郎 佐倉藩 組1 明治元年9月4日如来堂 19歳
高田文二郎 東京 組2 明治元年9月4日如来堂 31歳
吉田俊太郎 丹波篠山 組1 明治元年9月4日如来堂 20歳
糸部正親 山城京都 組1 明治元年9月4日如来堂 26歳



志村武蔵 相州 組1 明治元年9月4日如来堂 35歳
河合鉄五郎 幕臣 組3 明治元年9月4日如来堂 24歳

(3 箱館で戦死)



甲賀源吾 回天船将 明治2年3月25日箱館・回天 31歳
野村利三郎 大垣藩 組1 明治2年3月25日箱館・甲鉄 26歳
蟻通勘吾 高松藩 組1 明治2年5月11日箱館山 31歳
粕屋十郎 徳川臣 組5 明治2年5月11日箱館山 30歳
長島五良作 房州 組1 明治2年5月11日箱館山 18歳
中島三郎助・恒太郎・英次郎 徳川臣 明治2年5月16日千代ヶ岡 49・22・19歳

図1 「戦友姿絵」服装別分類

直立16図

「右傾」10図

「左傾」他3図

顔右向き 5図

顔左向き 3図

右ひざ上 4図

左ひざ上 4図

顔前 3図

顔後 3図

他(座・飛) 4図

その他 3図



図2 「戦友姿絵」 姿勢別分類



中島三郎助・恒太郎・英次郎 池田七三郎 吉田俊太郎 河合鉄五郎 千田兵衛 浪一郎 志村武蔵 余部正親 高田文二郎 荒井破摩男 山口二郎 土方歳三 近藤勇 中島三郎助



E 森蘭丸長康



C 業藤右兵衛大夫勝興



A 明石理太夫秀基



C 千場田修理進辰家



A 蔵橋全助武幸



E 大関和七郎



A 磯合重郎右衛門正久



D 磯合重郎右衛門正久



D 大塚信乃「豊園」(1857)



D 大塚由良之助藤原良雄(全体)



C 松永大蔵久英(胡座)



C 松永大蔵久英(胡座)



和宮



近世状義伝「猿の伝治(手水石)



「坂本忠臣蔵 大塚由良之助」 芳虎(四)



E 小西拱津守行長(首)



「巴御前 木曾左馬頭源義仲」 孟斎



「巴御前 木曾左馬頭源義仲」 孟斎



(アイヌ絵) 小窪清吉 長島五良作 津田丑郎 乙部剛之進 三好幹 栗原仙之介 甲賀源吾 菊地央 野村利三郎 柏屋十郎 蟻通陽吾 鈴木練三郎 木下蔵 伊藤鉄五郎 原五郎妹女



「三国通覧図説」



A 瀧田政之丞高敷(左手以外)



D 織部易兵衛源武康



A 小野寺藤右衛門秀留



C 中浦徳吉郎久吉(吉織)



A 早野輪助常成



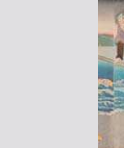
「岸柳島報警図」 国芳(1856)



A 行川三平宗明



「東錦浮世撰説」 芳年(1867)



A 小野寺重内秀知



B 柿崎和泉守景家



B 鬼兒嶋弥太郎虎秀



(夢形) 里見(八子宮一鼠尾上多見蔵)



D 余古河完平藤原宗利



A 千葉三郎平満忠(足裾)



「宇治川合戦 佐々木四郎高綱(良信(馬))



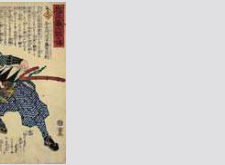
「東錦浮世撰説」 石川門外勝明



A 矢間真六光風



「宇治川合戦 佐々木四郎高綱(良信(馬))



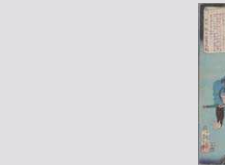
「宇治川合戦 佐々木四郎高綱(良信(馬))



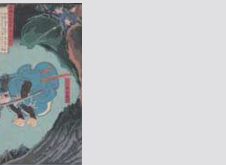
「宇治川合戦 佐々木四郎高綱(良信(馬))



「宇治川合戦 佐々木四郎高綱(良信(馬))



「宇治川合戦 佐々木四郎高綱(良信(馬))



「宇治川合戦 佐々木四郎高綱(良信(馬))



「宇治川合戦 佐々木四郎高綱(良信(馬))



「宇治川合戦 佐々木四郎高綱(良信(馬))



「宇治川合戦 佐々木四郎高綱(良信(馬))

復禄請願から見た旧館藩士の秩禄処分

山口 精次

はじめに

市立函館博物館所蔵「田原家文書」の中に含まれる「重要書類書留簿」(資料番号500754 収納番号0176)は秩禄処分関係文書、雑記などを含む文書である。

秩禄処分関係文書は政府が明治30年11月1日秩禄処分の不備を救済するため家禄賞典禄処分法を布告した際、復禄請願のため提出した書類の下書きで、田原音八の長男駒吉が書き残したものである。

秩禄処分とは、明治政府が支給した家禄賞典禄の支払を廃止した措置である。藩主が藩士の家格に応じて支給していた家禄を明治政府が肩代わり、明治2年それまでの家禄を減額して華族を除く士族・卒族の禄制を制定。明治6年徴兵令の布告をもって士族・卒の存在意義を奪い、禄制存続の根拠を消失させ廃止、戊辰戦争・箱館戦争・王政復古の功労者に与えた賞典禄も廃止した。

箱館戦争の戦禍で松前藩の領地は荒廃、財政は破綻。このため身分の上下に関係なく、家族の人数に応じて三合又は四合の禄米で飢えを凌いできた。この惨状により、館藩(明治2年6月改称)は政府が決めた家禄を既定どおり支給できず、既定額からさらに減額して支給。明治4年政府の禄高調査の際、この減額した改定禄高を届け出たため、以後政府はこの改定禄高を館藩の禄高と認定した。

全国的に秩禄処分に不満を持つ者は跡を絶たず、漸く政府は明治30年11月1日不備を救済するため家禄賞典禄処分法を布告。田原駒吉はこの布告に基づき明治2年制定

の禄高と改定禄高との差額を請願した。

全国からの請願件数は117,681件あり、うち却下された件数は918件、不許可は116,655件で、採用件数は僅か108件である。これが救済に名を借りた実態である。

明治政府が実施した秩禄処分と復禄請願の取り組みを田原駒吉の書き残した提出書類から明らかにする。

第1章 秩禄処分

明治政府が支給した家禄・賞典禄の支払いを廃止する政策のことを秩禄処分という。家禄は江戸時代の封禄に代えて、政府が華族・士族・卒に与えた給禄のこと。賞典禄は政府が戊辰戦争の軍功、箱館戦争の戦功、王政復古の功労者に論功行賞として与えたものである。賞典禄には直接本人に下賜したものと、下賜された藩主が任意に戦功のあった華士、卒に分与した分与賞典禄がある。家禄・賞典禄を合わせて秩禄という。賞典禄の財源は明治元年10月政府が奥羽諸藩から削り取った100万石を宛てた。

明治2年6月17日に版(土地)と籍(人民)を奉還後、政府は公卿・諸侯を華族、一門以下の武士を士族・卒とし、各藩主を知藩事に任命した。知藩事は非世襲の地方長官に該当する。家格を基礎に編成されていた家臣団を士族に等質化し、家格の優劣を否定、従来の武士と異なる性格を付与した。

1. 秩禄処分の実施

処分は家禄・賞典禄を段階的に削減、米の現石支給は公債の発行へと変え、最終的

に支給廃止の措置がとられた。処分は、明治4年7月14日の廃藩置県前は直轄府県と諸藩の禄制改革による家禄削減、廃藩置県後は大蔵省による禄制の廃止、秩禄・金禄公債の交付で行われた。

2. 廃藩置県前（家禄の削減）

政府は明治2年6月25日知藩事の家禄を旧封地現石の十分の一とした。以後知藩事は地方長官として政府の政策を遂行しながら、旧主君として代々臣従してきた士族の禄制改革に当たるという複雑な立場に立たされた。

明治2年12月2日政府は華族以外の士族、卒の禄制を制定。明治3年9月10日太政官日誌第38号「藩制」の公布により、さらなる禄制改革の標準を明示。知藩事の裁量による士族、卒の家禄削減を命じた。それによると、藩高の10%を知藩事の家禄とし、9%を海陸軍費、残る81%で藩庁の経費や士族、卒の家禄を賄うというものであった。また藩庁の負債（藩債）の消却年限見通計画、知藩事、士族、卒の家禄と藩庁経費削減による藩債の償却を命じた。

各藩の財政事情により家禄削減の方法は異なるが、いずれの藩も維新前から慢性的な財政難で、商人からの借入、藩札の発行に依存しながら藩を運営してきており、まさに破産状態である。その根本的な改善を余儀なくされた。

3. 廃藩置県後（禄制の廃止と秩禄・金禄公債の交付）

廃藩置県は260年以上続いた藩による支配に終止符を打った。華士族の家禄は全額政府に引き継がれ、生活維持はしばらくは保証された。財政破綻で正規の禄米を支給できなかった藩では士族、卒は大蔵省から禄米を受け、また旧藩主は家臣や領民と切り離され東京へ移住。破綻した財政の処理

や禄制改革などに対する不満は旧藩主から政府に転嫁された。

廃藩置県後の明治4年7月24日政府は全国の県に士卒禄高人員帳の作成と提出を命じた。後に家禄の代償として交付される秩禄公債や金禄公債の額面はこの数値を基礎に算定された。

明治5年1月29日に卒の身分を廃し、皇族・華族・士族・平民の四族とし、同年11月28日徴兵告諭をもって国民皆兵の方針が示された。明治6年1月10日徴兵令を公布。士族の常職を廃止する徴兵制の採用により士族は本来の存在意義を失い、禄制存続の根拠は消失、同年12月27日に太政官布告第423号、425号により家禄奉還制度と家禄税を課す暫定策が決定した。

4. 家禄奉還と秩禄公債

家禄を返上した士卒への帰農資金付与は既に明治3年11月に諸府県で5年分の一時賜金を支給するかたちで行われていたが、族籍の返上が前提だった。この制度は明治4年12月華士族の帰農商が自由化されると廃止された。

廃藩置県後、政府は秩禄処分（廃止）の一環として明治6年12月27日に太政官布告第425号、第426号により士族以下秩禄100石未満の希望者に奉還を認めた。その就業資金として永世禄は禄高の6年分、終身禄は禄高の4年分、年限禄は禄高の年数に応じて1～4年分を半額は現金、残り半額は秩禄公債で一時に支給し、以後は支給を打ち切ることにした。その際秩禄公債の禄高は明治6年の各府県貢納石代相場（米価）で金額に換算した。公債の細目は明治7年3月28日布告の家禄引換公債證書発行条例（太政官第39号布告）に規定された。

公債は年利8分、利払いは年1回、2年据え置後7ヵ年で償還。公債証書の額面は25円、50円、100円、300円、500円（実際

には発行されなかった)の5種。

明治7年11月5日、100石以上の者の奉還も認められた。50石分は現金で、残額は公債で支給。奉還率は鹿児島は皆無に近く、佐賀・山口は1割弱、新潟・三重は半数を越えたが、全国的に見ると奉還に応じた士族の割合には高低差があった。奉還者には家禄税が免除され、就産のための官林荒蕪地の払下げ代金を公債で納入することも認められたが、奉還率は低かった。

奉還者就産の目的は達成できず、明治8年7月14日太政官布告第125号で奉還停止となり、同年8月24日太政官布告第130号で本条例は廃止となり、公債発行は明治9年で終了した。公債の償還は明治9年から開始され、西南戦争の明治10年を除き、以後順調に償還され明治17年4月に完了した。

家禄税は陸軍費にあてる目的で家禄5石以上の者を対象とし、禄税を335段階に細分し、家禄に対し35～32%の累進税を課し、上層ほど高率で事実上家禄支給額を削減するものであった。

5. 禄制廃止と金禄公債

明治7年12月頃から政府は家禄の最終的処理の準備に着手し、明治8年9月7日太政官布告第138号により、家禄賞典禄は同年から現石での支給をやめ、地方ごとに明治5年から7年の3ヵ年平均の貢納石代相場(米価)で換算した金禄で支給することを布達した。これは家禄支出が米価の変動で左右されることを避けた措置である。

明治9年8月5日金禄公債発行条例(太政官布告第108号)を公布し、禄制廃止を宣言した。この条例により明治10年から家禄賞典禄の支給を廃止し、その代償として金禄の数年分を公債で一時に交付することにした。

華士族に交付される金禄公債額の算定方

法は金禄公債証書発行条例に規定された。

それによると、永世禄(代々その家に対し永久に支給される家禄)の場合、家禄高100円未満の者に対しては、家禄高を6級に分け、家禄高の11年6ヵ月分から14ヵ年分相当額の7分利付公債証書で支給。家禄高100円以上1,000円未満の者に対しては、家禄高を13級に分け、家禄高の7年9ヵ月分から11ヵ年分相当額の6分利付公債証書で支給。家禄高1,000円以上の者に対しては、家禄高を11級に分け、家禄高の5ヵ年分から7年6ヵ月分相当額の5分利付公債証書で支給。終身禄(一代限り支給家禄)の場合は永世禄の10分の5。年限禄の場合は年限の長短によって6級に分け、それぞれ永世禄の10分の1.5から10分の4とした。

公債証書の額面は5円、10円、25円、50円、100円、300円、500円、1,000円、5,000円の9種。額面未満の端数金額は現金で支払った。大部分の士族にとっては生活の維持が不可能な低額であり、さらに金禄への換算基準とされた3ヵ年平均の米相場は商品経済の発達していた関東・関西地方と遅れていた東北・北陸地方とでは著しい開きがあった。進んだ地方の金禄元高は遅れた地方のそれより高くなっていた。

金禄公債は明治10年発行、5ヵ年据え置き、明治15年から漸次償還し、明治39年4月全額償還を完了した。

参考文献

- 『日本歴史大事典』(平成12年 小学館)
- 『明治時代史大辞典』(平成23年 吉川弘文館)
- 『日本史大事典』(平成5年 平凡社)
- 『新・国史大年表』(平成23年 国書刊行会)
- 『国史大辞典』(昭和63年 吉川弘文館)
- 『新法律学辞典』(昭和39年 有斐閣)
- 『維新日誌』(昭和7年 静岡郷土研究会)
- 『維新日誌』(昭和8年 静岡郷土研究会)
- 『維新日誌』(昭和8年 静岡郷土研究会)

『維新日誌』(昭和8年 静岡郷土研究会)
『維新日誌』(昭和8年 静岡郷土研究会)
『明治ニュース事典』(昭和58年 毎日コミュニケーションズ)
『明治大正財政史』(昭和11年 財政経済学会)
落合弘樹『秩禄処分』(平成11年 中公新書)

第2章 田原駒吉の復禄請願

明治2年12月2日政府は禄制を布告。明治3年9月10日には藩制を改革し、知藩事の裁量による士族、卒のさらなる家禄削減を命じた。館藩は苦しい台所事情もあり政府が布告した新禄高より低い改定禄高、士族は現米11石、卒は9石を支給した。

館県(廃藩置県に伴い改称)は明治4年7月24日政府の士族、卒禄高調査の際、この改定禄高を報告、以後改定禄高が館県士族、卒の家禄とされた。館県は後青森県に編入され、士族、卒は青森県の貫属になった。旧津軽藩士は明治2年の禄制に基づく禄高を支給されたが、青森県貫族となった旧館藩士は改定禄高のままであった。

明治30年11月1日政府は家禄賞典禄処分法を布告。駒吉は明治2年12月2日制定の禄高と改定禄高との差額を復禄請願する。

1. 館藩の禄制

禄高は家格に対する給与の額で、家格は家臣団の中に於ける家の格式、家柄を表わす。家格の序列は各家の成立、家産の規模、先祖の由緒、功績、家業の貴賤で決まった。

「理由書」(「重要書類書留簿」内)によると、館藩の家禄は「往昔ヨリ諸士以上ヲ六級、徒士ヲ四級ニ分チ家禄ヲ七等ニ定メタルナリ家格ニ依リ支給セラル乃チ標示スル……」とある。それによると、家格に対する禄高(元禄高)は、寄合席(一門及家老)は500石。準寄合席(一門及普代の重臣)は375石。中書院席(重臣・奉行

・用人・吟味役)は200石。中の間席(士の上席)は150石。先手組席・同格(弓組・鉄砲組)は110石。古組御徒士・同格(徒士)は90石。新組御徒士・同格(足軽)は80石。括弧内の役職は福島町史から借用。続けて「……安政以来漸クニ而物騰価シ為メニ旧制ニ依ル御額ハ困難ヲ感スルヲ以各年補助ノ支給ヲ為セリ、元治二年四月迄ニ更ニ現米ヲ其家格ニ応ジ増給シニ施行セラレタリ……増給ヲ合セテ尔来一定ノ家禄トシテ支給セラレタリ……」と家格により増給石を支給している。

寄合席及準寄合席は現米10石(但 此石4斗入25俵)。中書院、中の間、先手組席は現米6石(但 此石4斗入15俵)。古組徒士・同格、新組徒士・同格は現米4石(但 此石4斗入10俵)。困難な生活を増給措置で凌いでいた。

2. 明治政府の禄制

明治2年12月2日(太政官日誌第109号)政府は華族を除く士族、卒の禄制を制定。これは従前の俸禄者の禄を総て取りあげ、稟米を給与するものであった。

旧禄高(元禄高)に対する新禄高は、600石未満400石迄は現米45石。400石未満300石迄は同35石。300石未満200石迄は同28石。200石未満150石迄は同22石。150石未満100石迄は同16石。100石未満80石迄は同13石。80石未満60石迄は同11石。60石未満40石迄は同9石となり、館藩の禄制の約十分の一。本家の田原竹蔵は古組御徒士で90石から13石に、分家の田原駒吉は永世御先手組格上席で110石から16石に、それぞれ減額された。

3. 松前(館)藩の窮状

箱館戦争の戦禍で松前藩の領地は荒廃し、財政は破綻していた。「理由書」によると、「…戊辰己巳ノ賊乱ニ羅リ賊帑窮耗

為メニ定禄ヲ士族ニ給与スル能ハス上下挙テ四合或ハ三合ノ面俸（＝身分の上下なく家族の人数に応じて支給する扶持米）ヲ以テ緯（わずか）ニ其饑餓ヲ支ヘシモノハ実ニ一時救急ノ為ス所ニシテ其復旧ノ前途ニ俊ツノ藩情ナリシモ會（あう）ニ廢藩置県ノ制度ニ革（あらた）マリ士卒一班館県ニ貫属（地方自治体の管轄に属すこと）シ猶面俸ノ支給ニ依然タリト雖モ亦未タ其家禄ヲシテ減殺没了等ノ酷裁ニ接セリ歴々以テ家禄ノ享有権ヲ亡ハザリシハ乃チ明治四年七月調査ノ結果ヲ以テ其事實ヲ証スルニ足ル可キナリ」。家禄の享有権を失った事實は明治5年の令旨に「家禄ノ義ハ已ニ大蔵省ヘ伺置候処別紙ノ通御差函ニ付此段相達候事但去未（明治4年）十月ヨリ旧館県改正禄高士族現米十一石卒同九石ノ内相渡置候面俸差引過不及（＝及ばないこと）渡方取調等ノ義追テ可相達候事壬申（明治5年）七月九日 青森県 福山出張所」と告示され、明治4年10月から改正禄高士族現米11石、卒同9石の支給が始まった。田原家は、本家が13石から、分家は16石から11石に減額された。原因は明治4年7月24日政府の禄高調査の際、改正禄高を申告したことに起因する。

4. 館県貫属から青森県貫属へ

さらに、「廢藩ノ後士卒一班館県ノ貫属ト為ルモ数月ナラズシテ館県ハ廢セシ弘前県ニ併合シ又数旬ナラズシテ青森県ト為ル士卒亦漸転シテ青森県貫属タルニ至リテハ後旧館県ノ羈絆（きはん＝つなぎとめる）ニアラサルナリ……青森県治ノ下ニ貫属タルニ於テハ旧各藩ノ士卒ト何ノ異ナル所アラン而シテ該各藩ノ士卒亦皆旧藩ニ於ケル既定ノ家禄ヲ有シ……然ルニ明治五年七月ヲ以テ旧館藩士卒ニ令シテ士卒ハ現米十一石卒ハ同九石ニ其禄高ノ改正ヲ決行セラレタリ然レトモ是青森県貫属一般ノ改正ニア

ラズシテ独館藩士卒ノ願上ニ決行セラレシモノハ聊モ県治上其制裁ノ公ナルヲ知ラサルナリ……」と述べている。

明治2年6月17日版籍奉還とともに松前藩は館藩となり、明治4年7月14日廢藩置県により館県となる。同年9月9日館県（管轄地は津軽・福島・槍山・爾志）は弘前県に編入、同23日弘前県は青森県と改称した。明治5年9月20日元館県領の管轄地は青森県より開拓使の管轄となった。

政府は旧館県貫属を青森県貫属としたのに、明治5年7月の令旨で館県の改定禄高をそのまま踏襲し改めなかった。

5. 旧館県と大蔵省への批判

旧館県に対して「理由書」では、「……禄高ニ削減ヲ加フルハ是因ニ処分ノ錯誤其致ス所ナリ然リ而シテ削減ノ禄高ヲ以テ遂ニ奉還或ハ金禄ノ制度ニ従フモノハ所謂下ノ上ニ於ル旧慣ノ情勢ニ制圧セラレ失望ノ地ニ沈論（ちんりん＝哀れむべき境遇になりさがる）シタルモノナリ……当時改正ノ禄高ノ処理ノ錯誤ニテ為ニ既定ノ家禄ヲ削減セラレタルト其削収ニ属スルモノハ皆未済額ナリシ……」と批判している。

大蔵省に対しては、「……館県ノ改正案ハ素ヨリ錯誤ニシテ県治ノ行為ニ背反シタルモノナリ……改正案ハ単ニ之レヲ提出シタル事ニシテ未タ決行ノ裁可ヲ得サレバ則チ該案ハ館県ノ存廢ト相伴ヒ其効力ノ得失ヲ為セルコト因ニ法理ノ稔然ナル所ナリ然ルヲ延ヒテ之レヲ青森県一定ノ制度ニ反シ牽強（けんきょう＝こじつけ）的ニ之レヲ襲用セルハ益其錯誤ヲ重スルモノタリ大蔵省モ亦其廢県ノ遺案ニ注カズ更ニ復青森県ニ利用セシメラレルハ蓋シ錯誤制裁ニシテ……」と不満を述べている。

6. 家禄賞典禄処分法の制定

明治4年7月24日実施の禄高調査は錯誤

や不統一が生じ、是正の要求が数多く寄せられた。政府は混乱を收拾するため明治6年2月3日第35号（太政官日誌第14号）を布告。禄高人員帳の記載内容などの不服申立を同年3月31日迄とし、以後一切採用しないとした。

それでも種々の願出はその後もあり、明治9年9月27日第123号を布告。現今の処置を以て、どの様な事実があっても以後一切採用しない事を再度命じた。

秩禄処分への不満はなお復禄請願のかたちで表面化し、政府は第123号布告を根拠に門前払いを取り続けた。帝国議会開設後は多数の請願が、質問書・建議案として議会で提出されるようになり、明治30年11月1日家禄賞典禄処分法（法律第50号）を制定。禄高是正の審理に応じる事になった。

第3章 復禄請願の実施

請願は家禄賞典禄処分法第1条の「…明治四年七月二十四日禄高二関スル布告ニ依リ調査シタル以後ノ禄高二……錯誤アルトキハ……」に基づき、田原要質、田原駒吉が「家禄未済額御下賜願」（「重要書類書留簿」内）を作成した。

家禄未済額御下賜願

北海道渡島国松前郡福島愛宕町百番地
士族 田原駒吉

当時北海道渡島国函館区
青柳町十九番地 寄留

右ハ、明治九年八月太政官第八号布告ニ基キ、別紙理由書ニ疎明スルガ如ク、当時改正ニ関スル禄高ニヨリ、金禄公債証書御下附相ナルモ、客年拾壹月法律第五拾号公布ノ家禄賞典禄処分法第壹条ニ拠リ、該錯誤ニ係ル未済ノ分御下賜被成下度乃チ各個計算書及証拠書類写ヲ相添へ、連署ヲ以テ奉願候也

右田原要質代理人 田原駒吉 印
明治参拾壹年拾月
大蔵大臣 松田正久殿

田原駒吉、田原要質（代理人 駒吉）とも同文の書類を提出。なお、要質は当時東京府麻布区筈町百三拾五番地に寄留していた。計算書については次の通りである。

家禄給与未済追求額計算書

田原駒吉

元禄高 90石

改正禄 13石 明治2年12月2日發布の禄制により給与を受くべき禄高

内 11石 明治11年金禄公債証書にて給与を受く

差引 2石 給与未済額

石代相場 1石4円51銭6厘

明治8年9月9日第138号布告により米額の称呼を廃し金禄に改定。明治5年から7年までの毎地方貢納石代相場の平均を以て算出

年限 12ヵ年

金額 2石×4円51銭6厘×12ヵ年＝108円38銭4厘

利息 年5朱

期間 21ヵ年 明治11年から明治31年まで

金額 108円38銭4厘×0.05×21ヵ年＝113円80銭3厘2毛

請求願高 108円38銭4厘＋113円80銭3厘2毛＝222円18銭7厘2毛

田原要質

元禄高 110石

改正禄 16石 明治2年12月2日發布の禄制により給与を受くべき禄高

内 11石 明治11年金禄公債証書にて給与を受く

差引 5石 給与未済額
 石代相場 1石4円51銭6厘。明治8年9月9日第138号布告により米額の称呼を廃し金禄に改定。明治5年から7年までの毎地方貢納石代相場の平均を以て算出

年限 12カ年
 金額 5石×4円51銭6厘×12カ年＝270円96銭
 利息 年5朱
 期間 21カ年 明治11年から明治31年まで
 金額 270円96銭×0.05×21カ年＝284円50銭8厘
 請求願高 270円96銭＋284円50銭8厘＝555円46銭8厘

1 復禄請願のその後

この処分法の法文は明瞭を欠いたため、各地方官から種々の問い合わせがあり、明治32年3月23日家禄賞典禄処分法施行法法律第84号を布告。廃藩置県前後に各藩から諸管庁に提出された藩の財政計画、士族卒族の禄に関する願書や届と請願書の調査を決定した。

法律第84号は第1条2項で調査の目的を「明治四年七月十四日前各藩ニ於テ最後ニ定メタル制度（各藩ニ於テ最後ニ定メタル制度ニシテ廃藩以後各府県ニ於テ施行シタルモノトモ）……」と定め、内閣内務省や大蔵省に保存する記録の調査を命じている。

請願書提出の手続きは願書に錯誤の理由を詳記、証拠書類・新旧戸籍謄本を添付、本籍地地方庁を経由し大蔵省へ差出すと定められた。

臨時秩禄処分調査局は明治33年4月1日から事務を開始。請願の種類は極めて多く、藩制施行後の廃禄・減禄を不当とするもの、

藩債償却の為減禄した復旧を請うもの、金禄石代相場の相違を指摘するもの、禄高の処分漏れ、還禄資金や金禄公債の不足など。

請願書の記載では願旨不明、記載漏れ、証拠書類の不明不備が多く、調査局は証拠書類の調査、関係各官庁、地方庁への問い合わせ、官吏の派遣など手数と労苦で困難をきわめた。処分の成案を得たものは臨時秩禄処分調査委員会の議に付し、同委員会の議決を経て更にこれを閣議に提出し裁定を経て処分を決定する。調査に着手して閣議決定したのは明治34年3月。明治38年7月処分を完了し、同年9月各請願者に通知した。

全国各地から提出された請願は117,681件、人員は297,446名。却下件数は918件、人員は3,491名。不許可件数は116,655件、人員は290,049名。採用件数は108件、人員は3,906名。採用は全体の0.092%、人員は全体の1.313%であった。

禄高処分の錯誤引直（もとにもどすこと）について、「廃藩置県以来明治9年布告第123号の公布迄の間に於て各地より種々の請願ありて、当時既に皆相当の処分を経たるを以て、其の後に至りて新に引直を要すべきもの多数残存すべき理なく、其の採用すべきものの僅少なるは固より当然なりとす」とある。

救済には莫大な費用がかかり、財政支出の問題がある。採用件数の少なかった要因は、明治6年布告第35号と明治9年布告第123号にあった事が分かる。

第4章 田原家累代の人々

田原家は天明2年(1782)から明治4年まで、4代約90年間松前（館）藩に仕えた家である。田原家の累代の家格と系譜を紹介する。

1. 田原家累代の家格（役職）

田原家は3代目まで藤右衛門を襲名。初代は不詳。2代目は藤右衛門唯蔵（信常）、3代目は藤右衛門孝蔵（常房）である。

家格は、初代は天明2年町足軽から町役所台所支配、文化6年(1809)2月27日死去。2代目は天明2年町足軽から新組御徒士家席、天保12年(1841)8月18日死去。

3代目を継ぐ予定の田原権六は文化13年(1816)足軽から新組御徒士家席、2代目存命中の天保10年(1839)2月28日死去。息子孝蔵は家督を相続、天保12年3代目を襲名。嘉永6年(1853)御用之間次勤、新組御徒士から古組御徒士。明治元年(1868)11月1日箱館戦争で戦死。

3代目孝蔵の弟、分家の田原音八（忠脇）は天保2年(1831)足軽並から家席永世内下代格、大砲銃士、明治元年11月5日箱館戦争及部之役で戦死。死後軍功により永世御先手組格。

3代目孝蔵の長男竹蔵は安政5年(1858)2月生。明治元年12月家督を相続。明治2年父の軍功により永世家禄20石加増。明治9年11月2日18歳で病死。

音八の長男駒吉は慶応元年(1865)1月15日生。明治元年11月家督を相続。明治2年父の軍功により永世家禄40石加増。明治4年新組御徒士から永世御先手組格上席。駒吉は後函館師範学校を卒業し、明治18年6月磯谷小学校訓導、明治22年函館区弥生小学校へ転任。明治44年12月標津尋常高等小学校訓導兼校長を最後に明治45年1月退職。昭和6年2月5日亀田村内46（現宮前町）で死去。

2. 田原家の系譜

明治9年本家の竹蔵は満18歳で病死。この為分家の駒吉が本家へ移籍、本家の家督を相続。翌年分家は本家の長女テルを養女として貰い受け、テルの婿となった要質が

分家の家督を相続した。本家と分家が入れ替わっている。

おわりに

田原駒吉の請願禄高は2石、請求願高は222円18銭7厘2毛。田原要質の禄高は5石、請求願高は555円46銭8厘である。復禄請願の提出書類は業務委託し、新旧戸籍謄本を添付、地方庁を經由して大蔵省へ提出された。業務契約書によると、許可された際の報酬は請求願高の3割。不採用の際は業務受託者が諸経費を負担することになっていた。旧館藩士が一斉に委託したと思われる業務請負者の実態は不明である。

請願の採用書類が見当たらず、復禄請願の取り組みは徒労に終わったと思われる。

田原音八は田原家3代目田原藤右衛門孝蔵（常房）の弟。箱館戦争及部之役で、松前藩大砲隊士として幕府軍と戦い明治元年11月5日戦死。戊辰戦争の政府軍戦死者として靖国神社に合祀されている。

田原音八の諱は田原音八関連資料の「由緒書」に「田原藤右衛門二男 忠脇 田原音八 靈照院様御代（9代藩主 章広。寛政4年就任。天保4年退任）天保二卯年五月朔日足軽並江御奉公被仰付……」とあり、忠脇である。

戦死時の年齢は「記」に「渡島国津軽郡福山第八大区四小区愛宕町百拾五番地居住士族田原竹蔵借宅 亡父田原藤右衛門二男 田原音八 壬申（明治5年）五十六歳六ヵ月」とあり、52歳である。

田原駒吉は音八の長男。父の戦死後田原家の家督を相続、満3歳で館藩士。明治9年本家の田原竹蔵病死により、本家を相続する。明治17年函館師範学校を卒業。磯谷小学校訓導を皮切りに各地を転任。明治44年標津尋常高等小学校訓導兼校長で退職した。

明治22年6月母と息子を伴って松前松城

小学校から函館区弥生小学校へ転任した際は『函館有名一覽』（明治24年2月改定 著者兼出版人 曲淵信正）に孝子（孝行息子）として採録されている。

退職後の昭和3年には教え子から庵を贈られ『函館毎日新聞』（昭和3年5月22日、24日）に〔静寄庵の主人 田原先生の思い出話〕として「…田原駒吉翁は今より四十年以前の函館教育界に於て多大の貢献をした人である。其居宅『静寄庵』は実にその当時の教え子現市議員外山平治さんや西村滋次郎、吉村良蔵、由利弘、藤堂利吉、宮崎大四郎、西村利光、古旗耕の諸氏を始め数十名の人々が先生の鴻恩の万分の一にも酬ひんと醸金し老後の安住のために贈った……」と掲載されている。因みに師弟の純情に感動し、『静寄庵』と命名、揮毫したのは徳富蘇峰である。

旧館藩士は田原家と同様に復禄請願したと思われる。田原家以外の秩禄処分関係文書の発掘と調査が進めば解明は更に深まるものと思われる。

参考資料

○家禄賞典禄処分法

（明治30年11月1日 法律第50号）

第一条 明治三年九月十日太政官布告藩制施行以後家禄賞典禄ヲ有シタル者及其ノ家名承継人ニシテ明治九年八月太政官第百八号布告及同年十二月太政官第百五十二号布告施行ノ際其禄高二対スル全部ノ給与ヲ受ケサル者若ハ相当額ノ給与ニ不足アル者明治四年七月二十四日禄高二関スル太政官布告ニ依リ調査シタル以後ノ禄高及其調査以前ニ係ル藩制施行以後ノ禄高二錯誤アルトキハ本法施行ノ日ニ於テ其ノ本人又ハ其ノ家名承継人ニ限り其ノ給与未済額ヲ明治九年八月太政官第百八号布告第1条及同年十二月太政官第百五十二号布告ノ率ニ抛リ換算シ其ノ元金額ヲ禄高整理ノ為メ発行スル公債証書ヲ以テ給与ス 但シ常事犯ノ為没禄若ハ減禄セラレタルモノハ此ノ限ニ在ラス

『明治大正財政史 第11巻』（昭和11年 財政経済学会）

○家禄賞典禄処分法施行法

（明治32年3月23日 法律第84号）

第一条 家禄又ハ賞典禄ハ左ノ標準ニ抛リ之ヲ調査ス

- 一 政府ノ布告布達其ノ他ノ命令ニ依リ定マリタル制度
- 一 明治四年七月十四日前各藩ニ於テ最後ニ定メタル制度（各藩ニ於テ最後ニ定メタル制度ニシテ廃藩以後各府県ニ於テ施行シタルモノトモ） 以下略

『明治大正財政史 第20巻』（昭和33年 経済往来社）

○明治3年9月10日 太政官日誌 第38号

今般藩制別紙の通り仰出され候、もとよりその綱領を揚げられ候儀にて、節目施設

の方に至りては、とくと御旨意を奉体し、藩々その宣を斟酌し、務めて旧弊を除き有名無実に涉らず、政績相顕われ候よう尽力致すべき事（省略）

1. 藩高

譬えば現米十萬石

内一萬石 知事家禄

残九萬石 ただし、公廨諸費常額、追って相定めらるべきに候えども、当分は左の通り

内九千石 海陸軍費。ただし、その半を海軍資として官に納め、半を陸軍資に充つべき事

残八萬千石 ただし、公廨入費、士卒禄に充つべし。もつとも精々節減し、有余を以て軍用に蓄え置くべきよう心掛くべき事

1. 官禄藩々の適宜に任すべき事（省略）

『明治ニュース事典 第1巻』（昭和58年毎日コミュニケーションズ）

○明治4年自7月24日至25日 太政官日誌 第47号

諸県元藩へ御布告写

今般各藩被廢候ニ付テハ、大蔵省官員出張、會計向夫々精密取調可相成候得共、差向キ従来之藩債ヲ始、別紙雛形之条々、迅速取調往復日数之外、十五日ヲ限り、大蔵省へ可差出、尤尋問即答相成候者、持參可致事。

（雛形）用紙美濃紙堅帳

表紙 士族卒禄高取調帳

元高何萬石

此現米何萬石

扶持方何人扶持

合改正高現米何萬石

扶持方何人扶持

内 片方三行ニ認ムヘシ

元高何千石

此現米何拾何石

扶持方何人扶持

改正高 現米何拾何石

扶持方何人扶持

士族卒何ノ某、以下省略

『維新日誌 卷6』（昭和8年 静岡郷土研究会）

○金禄公債證書発行条例

明治9年8月5日第108号布告

家禄賞典禄ノ義永世一代或ハ年限等ヲ以テ給与有之候処其制限ヲ改メ来明治十年ヨリ別紙条例之通公債證書ヲ以テ一時ニ下賜候条此旨布告候事

（別紙）

金禄公債證書発行条例

第一条 華士族及ヒ平民トモ各自ノ家禄賞典禄給与ノ制限ヲ改メ一時ニ之ヲ下渡スコトト為シ以テ公債證書ヲ付与スヘシ

一 永世禄ノ者ヘハ賞典禄アルモノハ家禄ニ合計シ元高トス

金禄元高 年限

七万円以上 五ヶ年分

七万円未滿六万円以上 五ヶ年二分五厘分 以下略

五千元未滿二千元以上 七ヶ年二分五厘分

二千元未滿千円以上 七ヶ年半分

一ヶ年五分ノ利息ヲ給ス
千円未滿九百円以上 七ヶ年七分五厘分

九百円未滿八百円以上 八ヶ年分 以下略

二百円未滿百五十円以上 十ヶ年半分

百五十円未滿百円以上 十一ヶ年分

一ヶ年六分ノ利子ヲ給ス
百円未滿七十五円以上 十一ヶ年半分

七十五円未滿五十円以上 十二ヶ年分

五十円未滿四十円以上 十二ヶ年半分

四十円未滿三十円以上 十三ヶ年分

三十円未滿二十五円以上 十三ヶ年半分

二十五円未滿以下 十四ヶ年分

一ヶ年七分ノ利子ヲ給ス

『明治大正財政史 第20巻』（昭和33年
経済往来社）

○布告第35号

（明治6年2月3日 太政官日誌第14号）

旧藩々貫属禄高人員帳ノ内、旧官員調達ノ
趣ヲ以テ、当今ニ至リ屢引直方申出、或ハ
卒ノ者、士民へ編籍方、今以不申出向モ有
之、禄高調方ニ差支、不都合ノ次第二付、
右様ノ類ハ、都テ来ル三月三十一日限、大
蔵省へ可申立、右期限後ハ、一切採用不致
候条、民籍編入之儀ト可相心得事

『維新日誌 卷八』（昭和8年 静岡郷土
研究会）

○布告第123号

（明治9年9月27日 太政官日誌第72号）

旧藩々貫属禄高引直シノ事

明治六年二月第三拾五号ヲ以テ、旧藩々貫
属禄高引直シ願ノ儀、同年三月三十一日限
リ可申出、右期限後ハ一切採用不致旨布告
候処、爾後禄高ニ関シ、種々願出候向モ有
之候得共、本年八月第百八号布告ヲ以テ、
禄制改定候ニ付総テ現今ノ処置ヲ以テ定度
トシ、如何様ノ事実有之共、一切採用不致
候条、此旨更ニ布告候事

『維新日誌 卷十』（昭和8年 静岡郷土
研究会）

○田原家累代の家格（役職）

初代 田原藤右衛門

天明2年(1782) 町足軽

寛政10年(1798) 町足軽、台所支配

文化4年(1807) 町足軽、町役所台所支配

文化5年(1808) 梁川表へ転国の際御暇被
下

文化6年(1809) 2月27日 死去

2代 田原藤右衛門 唯蔵（信常）

天明2年(1782) 2月1日 町足軽

文化5年(1808) 御暇被下

文化6年(1809) 家督相続

文化13年(1816) 8月28日 梁川表で足軽、
金4両2人扶持

文政4年(1821) 12月22日 古組御徒士へ繰
上、永世士族へ繰上、金6両 米19俵
2斗

文政6年(1823) 4月 御徒士、金10両4人
扶持

文政13年(1830) 9月27日 新組御徒士家
席、1ヵ年御手当金2両

天保12年(1841) 8月18日 死去。跡式孝蔵
（孫）

田原権六

文化13年(1816) 8月28日 足軽

文政4年(1821) 12月22日 古組御徒士へ繰
上

文政6年(1823) 4月 1ヵ年御手当金2両

文政13年(1830) 9月27日 新組御徒士家
席、1ヵ年御手当金2両

天保10年(1839) 2月28日 死去

3代 田原藤右衛門 孝蔵（常房）

天保10年(1839) 家督相続

弘化4年(1847) 2月1日 初御目見、金10
両3人扶持

嘉永6年(1853) 御用之間次勤、新組御徒
士

文久元年(1861) 古組御徒士へ繰上

明治元年(1868) 11月1日 箱館戦争で死去

田原音八（忠脇）

天保2年(1831) 5月1日 足軽並、後組足
軽御奉公

天保6年(1835) 8月 砲術為熟練一代後組
足軽、新規永卒召抱

天保7年(1836) 町方勤

天保12年(1841) 国後出張(3月25日～4
月24日)

弘化2年(1845) 町方頭取
弘化3年(1846)12月12日 新組足輕へ繰上
嘉永元年(1848)4月2日 新組御徒士格へ繰上
嘉永2年(1849)8月 永世新組足輕から一代古組徒士席へ繰上
11月13日 新組御徒士へ繰上
嘉永3年(1850) 蝦夷地勤番として子モロ駐在(徒士)
嘉永6年(1853) 新組御徒士、町方頭取
文久元年(1861)8月22日 御書取から新組足輕へ、一代古組徒士席
文久2年(1862)3月3日 永世士族へ繰上
慶応元年(1865)7月15日 家席永世内下代格
明治元年(1868)10月28日 大砲銃士
11月5日 箱館戦争及部之役で戦死。永世御先手組格上席

田原竹蔵

安政5年(1858)2月 誕生
明治元年(1868)12月 家督相続
明治2年(1869)12月23日 父孝蔵の軍功により永世家禄20石加増
明治9年(1876)11月2日 死去

田原駒吉

慶応元年(1865)1月15日 誕生
明治元年(1868)11月 家督相続
明治2年(1869)12月23日 父音八の軍功により永世家禄40石加増
明治4年(1871) 新組御徒士(旧館藩)
12月 永世御先手組格上席(旧館藩)
明治7年(1874) 給禄11石
明治9年(1876)12月9日 竹蔵死去により本家へ移籍、家督相続
明治10年(1877)2月 福山松城学校下等第6級卒業
5月 福山松城学校下等第5級卒業
明治12年(1879)4月21日 福山松城学校下

等小学第4級卒業、褒賞授与
11月4日 福山松城学校下等小学第3級卒業、褒賞授与
明治13年(1880)2月26日 福山松城学校下等小学第2級卒業、褒賞授与
8月10日 福山松城学校下等小学第2級卒業、褒賞授与
11月30日 福山松城学校小学2級後期卒業
明治14年(1881)2月22日 福山松城学校小学1級前期卒業
5月29日 小学教科官費修行
明治17年(1884)7月31日 函館師範学校制定の教科を履修し成規の試業を完了。中等師範学科卒業証書授与。向後7ヵ年間小学初中等科の教員免許取得
8月4日 函館師範学校中等科第1級卒業「函館新聞」
8月18日 磯谷小学校4等訓導、月俸11円「函館新聞」8月20日
明治18年(1885)6月7日 熊野小学校へ転任。4等訓導「函館新聞」
11月2日 月俸金12円「函館新聞」10月28日
明治19年(1886)4月 松城小学校へ転任
10月 体操科講習試験(26名中3位)「松前教育雑誌第3号」
明治22年(1889)6月 函館区弥生小学校へ転任。母トミ、長男正路と汽船で函館へ。函館区春日町1番地(柴沼由之持家)
明治23年(1890)1月 函館区弥生小学校室分校が小学校に昇格、同校へ転任「函館新聞」22年12月28日
12月 賞金6円下賜(勉励)「北海」12月21日
明治24年(1891)7月15日 有効年限満期の処、更に明治24年7月15日から明治29年7月14日まで5ヵ年間延長「北海道庁」

明治25年(1892)8月27日 第一次講習会に於て教育学、倫理学、教授術の講習終了「函館教育協会」

明治26年(1893)8月28日 第二次講習会に於て心理学教授術、物理化学の講習終了「函館教育協会」

明治27年(1894)5月15日 函館区春日町25番地から汐見町12番地第7官舎へ移転

明治34年(1901)4月1日 宝尋常高等小学校訓導から高砂尋常小学校訓導兼校長へ栄転「北海道教育雑誌第100号」

明治35年(1902) 函館教育会理事「函館教育会沿革史」

明治36年(1903)3月3日 休職(病氣)。賞与金40円(勉励)「函館公論」3月10日

明治38年(1905)12月1日 国後郡国後尋常高等小学校校長「北海道教育雑誌第155号」

明治39年(1906)12月1日 国後郡国後尋常高等小学校訓導兼校長「北海道教育雑誌第167号」

明治40年(1907)12月 国後郡国後尋常高等小学校訓導兼校長「北海之教育第180号」

明治44年(1911)2月5日 国後郡国後尋常高等小学校訓導「北海之教育第217号」
4月28日 標津尋常高等小学校訓導兼校長(5代目)、伊茶仁教育所・忠類教育所校長、12月7日迄「北海之教育第227号」「標津町史」

明治45年(1912)1月 退職「北海之教育第229号」

大正5年(1916)～6年 幸尋常小学校代用 寒川教授詰「北海之教育第287号、第299号」

昭和6年(1931)2月5日 死去「函館日日新聞」2月6日 田原駒吉 追加典拠『北海道教育雑誌第1巻～第17巻上』
明治24年3月から『北海之教育第17巻

下～第27巻下』大正6年12月まで(北海道教育会機関誌復刻版 文化評論社)

(古文書調査講座参加者)

アイヌ絵粉本考

奥野 進

1. はじめに

市立函館博物館は、「開拓使収集資料」、馬場コレクション、児玉コレクションなどの国内有数のアイヌ関係資料のコレクション⁽¹⁾を所蔵しているが、その中には「アイヌ絵」⁽²⁾も多く含まれている。

これらのアイヌ絵は、「アイヌ絵展覧会」（市立函館博物館ほか 1963年 於：棒二森屋デパート）や函館市北方民族資料館常設展示などで展示され、一部作品の他館展覧会への出品や出版物での掲載利用はあったが、所蔵作品全体がまとめて紹介されることはなかった。このため、2018年度収蔵資料展「描かれたアイヌ—市立函館博物館所蔵資料に見るアイヌの姿—」（2018年9月29日～2019年6月2日、市立函館博物館第2展示室）の開催、展示図録（非売品）の発行にあたり、あらためて所蔵資料の概要調査を実施し、その結果を図録巻末に所蔵作品一覧としてまとめた⁽³⁾。

所蔵作品一覧をまとめたのは、①「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」（市立函館博物館 1981年）発行後に収蔵した資料の目録が公開されていないため、目録未収録の資料が多数存在すること、②2017年（平成29）に、アイヌ絵を多数含む資料群が児玉家から寄贈され、新たに児玉コレクションに加わったこと、③2020年（令和2）4月の国立アイヌ民族博物館の開館を機に、アイヌ文化への関心が高まり、アイヌ絵の利用増加が予想されたこと、などの理由による。今後、当館が所蔵するそれぞれの作品について、

他機関・個人蔵の作品と比較検討することで、新たな発見につながることを期待するものである。

今回の館蔵アイヌ絵の調査のなかで、いくつか確認できた事項があるが、本稿では特に、絵師の下絵や模写などの手控えとされる「粉本」⁽⁴⁾と呼ばれる資料群に注目して、その現状をまとめて紹介したい。

2. 3つのアイヌ絵粉本

市立函館博物館が所蔵する粉本は、収蔵履歴から、以下の3つのグループが存在している。それぞれのグループについて、現在把握できる情報をまとめてみたい。

（1）山田繁造旧蔵資料

資料番号：800262～800290

点 数：29点

受 入：1957年（昭和32年）寄贈

旧蔵者の山田繁蔵は、日魯漁業株式会社（現在のマルハニチロ株式会社）、日魯鉄工所の社員で、陶器のコレクターであった⁽⁵⁾。本資料について、当館の記録には、寄贈年が1957年（昭和32）であることしか記録がなく、なぜ、山田繁蔵がこの資料群を所蔵していたのか、当館への寄贈にかかる経緯などの詳細は不明である。アイヌ絵の粉本以外にも、イクパスイ（捧酒箸）や三平皿などの資料も寄贈されているが、収蔵年月日が異なっているため、直接の関係はないと考えられる。

1967年（昭和42）から市立函館博物館運営協議会の委員を務めた若山徳次郎氏による、「博物館に館としての資料台帳は何もなかったんですよ。個人的な台帳は持っていましたがね」⁽⁶⁾との証言や、1981年（昭和56）当時「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」の編集を担当した職員による「台帳はなく、資料ラベル等の記載から目録情報を得た」⁽⁷⁾といった証言から、そもそも詳細な記録が存在していたのかも明らかでない。

同目録では、一部資料の作者を雪好、平沢屏山としているが、館に残された同時代の記録がなく、作者が明記された記録も見当たらない。作者は、描写内容から目録作成時に付された可能性が高い。

本資料については、ベニヤ板と板ガラスの間に挟んで布テープで封入されていたが、保存・利用等のため、これらの外装を除去した。寄贈当初から本形態であったかどうか定かでないが、同じような保存方法は、市立函館図書館（現在の函館市中央図書館）でも多用されていた。函館博物館は1943年（昭和18）4月から1948年（昭和23）7月までの間、一時、市立函館図書館の附属博物館として位置づけられていた時代がある。1948年に市立函館博物館設置条例により、組織上図書館から独立した後も、拠点となる五稜郭分館が開館する1955年（昭和30）6月までの間、事務室は図書館内に間借りしていたこと、本資料受入当時在籍した職員の中には、長らく図書館に在籍していた職員もいたことなどから、当館寄贈後に外装が施された可能性もある。

（2）平塚常次郎旧蔵資料

資料番号：800291-001～038

点 数：38点

受 入：1957年（昭和32）寄贈

一括して「アイヌ絵下絵」という資料名が付されており、函館を代表する企業であった日魯漁業株式会社社長で1946年（昭和21）から運輸大臣も務めた、平塚常次郎の寄贈による資料である。1957年（昭和32）に寄贈されたことが確認できるが、山田繁蔵旧蔵資料同様、現在までのところ履歴が確認できる資料は見つかっていない。平塚、山田両氏とも日魯漁業株式会社の関係者で、寄贈年も同じであることも気になるが、両者の関係性はわからない。

同じ1957年には、同氏により、「アイヌ風俗十二ヶ月屏風（1月～6月）」の模写が寄贈されている。こちらについては、新聞記事⁽⁸⁾である程度の経過を追うことができるが、記事では本資料への言及はなく、直接の関係も不明である。

なお、本資料も山田繁蔵旧蔵資料同様の外装が施してあったが、除去した。

用紙端に綴り穴の跡があることから、この一群の資料は、時点は不明だが、綴じ紐で綴られていたものと考えられる。

（3）児玉コレクションに含まれる資料

資料番号：K-H13-0450-01-01～12、

K-H13-0450-02-01～09

点 数：21点

受 入：2017年（平成29）寄贈

資料番号：R01-0003-001

点 数：1点

受 入：2019年（令和元）寄贈

従来、児玉家から寄託されていた資料群で、他に寄託されていたアイヌの生活用品とともに、2017年（平成29）に新たに寄贈された資料（21点）と2019年（令和元）に追加で寄贈された資料（1点）である。

児玉作左衛門による収集について、詳し

くは触れないが、アイヌ絵についても生活用具同様、古書店などから買い集めていたことが分かっている⁽⁹⁾。

2017年に寄贈された資料は、「(函館某家蔵)平沢屏山の粉本(但し裏打あり)蝦夷島奇観 蝦夷国風図絵の模写を企てたもの」との記載のある紙製ケースに収納されている。ケース自体が新しく、箱書きもフェルトペンによるものであるため、資料と同年代のものではないが、児玉が所持していた頃には、そのように考えられていた、と見ることができる。

また、もう1点、追加された資料は、他の掛け軸などの書画に紛れ込んでいた「おひょう漁図」である。本資料については、前者に含まれていたものが分離されたものか、全く出所が異なるものかは、現状からは特定できなかったため、本稿では別系統とした。なお、現状から関係性を読みとることはできないが、一連の資料のなかに、アイヌ絵の粉本ではない鶴図粉本が含まれていた。

3 つながった2つの粉本グループ

3つのグループに含まれる個々の粉本については、市立函館博物館所蔵アイヌ絵粉本一覧(28~30頁)の通りである⁽¹⁰⁾。その特徴を大雑把に言えば、山田繁造旧蔵資料と児玉コレクションに含まれる資料は、「蝦夷島奇観」や小玉貞良、千島春里、雪好など、他の作者に類似した作品が比定される下絵的な資料群(以後、「下絵資料」とする)であり、平塚常次郎旧蔵資料の描写は、他に類例のないスケッチのようで、明らかに特徴を異にしていることが分かる(以後、「スケッチ資料」とする)。

下絵資料のなかには、一見して「蝦夷島奇観」と判断できる粉本が多数含まれていたことから、それらを選び出して、余白の「上巻」「下巻」や漢数字などの記載に従

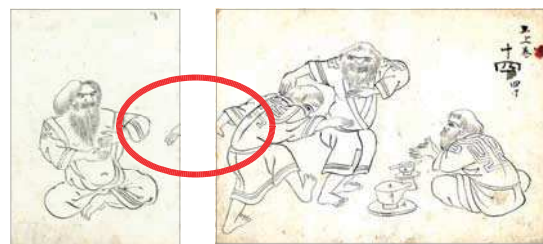
って並べたものが「『蝦夷島奇観』粉本番号順復元図」(31~32頁)である。一部、上下巻・番号のないもの、文字を読み取ることができず、上下巻の記載内容が誤っていると考えられるものもあったため、それらについては他の「蝦夷島奇観」を参考として、できるだけ順序の復元を試みた。

結果、山田繁造旧蔵資料と児玉コレクションに含まれる資料の2つのグループの粉本が混在している可能性が明らかとなった。

さらに、確認作業の過程で、山田繁造旧蔵資料の資料番号800266と児玉コレクションのK-H13-0450-01-03は、ともにその一部を欠いていたが、この2つの資料がぴったりとつながることが確認できた。

この結果から山田繁造旧蔵資料と児玉コレクションに含まれる資料はもともと1つの資料群であったことが判明した。

さらに、調査をすすめるうちに、すでに寄贈されていた児玉コレクションのなかに、この蝦夷島奇観の粉本を元に描かれたと考えられる作品が見つかった(H10-0051



山田繁造旧蔵資料
800266

児玉コレクション
K-H13-0450-01-03



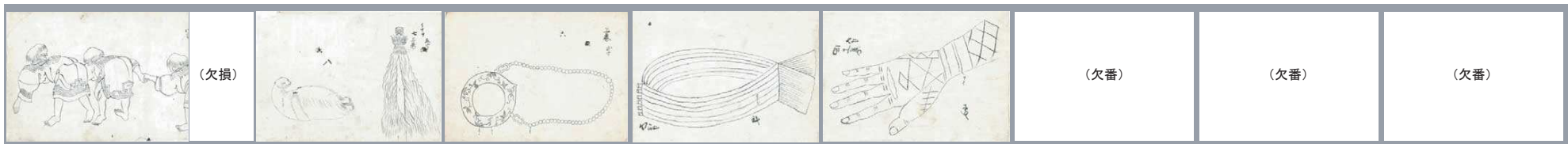
接合後の状態

市立函館博物館所蔵アイヌ絵粉本一覧

資料番号	資料名	サイズ(cm)	資料詳細	
平塚常次郎旧蔵資料				
800262	男女出猟図 粉本	83.0×45.0	一枚物(3枚継) 紙本墨書 1枚 「子モロ請負人 藤野喜兵衛」「ソウヤ請負人 藤野喜兵衛」「イシカリ請負人 阿部屋 伝次郎」、天地を示す「上」「下」の記載がある。「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」(市立函館博物館 1981、以下「蔵品目録」とする)で作者は雪好とされる。「男女出猟図 粉本」(800263)、男女出猟図 粉本」(K-H13-0450-07、児玉コレクション)と同系統の図	
800263	男女出猟図 粉本	83.0×40.5	一枚物(3枚継) 紙本墨書 1枚 「男女出猟図 粉本」(K-H13-0450-07、児玉コレクション)、妻沼コレクション(北海道博物館 収蔵番号126271)は、ほぼ同じ構図。「蔵品目録」で作者は雪好とされる。「男女出猟図 粉本」(800263)とも同系統の図	
800264	蝦夷島奇観 女夷の礼(・喫煙図) 粉本	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「十五 上巻 六寸」の記載あり。右端は「蝦夷島奇観 其四(女夷の礼)」とある。「蔵品目録」では作者は雪好とされる	
800265	[蝦夷島奇観] 飲酒図 粉本	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「上巻 九寸 十式」の記載があり。「蝦夷島奇観」の一部か。右端は「蝦夷島奇観 サイモン図」に描かれた女性の左右反転図、中央の男性2人は「蝦夷島奇観 飲酒図」の一部の左右反転図に似る。「蔵品目録」では作者は雪好とされる	
800266	[蝦夷島奇観] 踏舞図 粉本の一部	31.5×23.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「蝦夷島奇観」の一部か。K-H13-0450-01-03に連続する図。「冊子目録」では作者が雪好とされる	
800267	狩猟図 粉本	48.0×60.0	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 「蔵品目録」では作者は雪好とされるが、むしろ当館所蔵の千島春里「狩猟図」(800120)、「蝦夷風俗屏風」(天理大学附属天理図書館)などに近い	
800268	犬と母子図 粉本	28.0×46.0	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 「蔵品目録」では作者は雪好とされるが、左端の子供は「狩猟図 粉本」(800267)と同じ姿であり、中央の女性と犬の描き方・構図は千島春里の図に似る	
800269	機織図 粉本	45.0×50.0	一枚物(3枚継) 紙本墨書 1枚 「蔵品目録」では作者は平沢屏山とされる	
800270	糸撚図 粉本	45.0×50.0	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 「蔵品目録」では作者は平沢屏山とされる	
800271	水辺糸巻図 粉本	45.0×50.0	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 「蔵品目録」では作者は平沢屏山とされる	
800272	網運搬図 粉本	45.0×50.0	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 「蔵品目録」では作者は平沢屏山とされる	
800273	イナウ作図 粉本	45.0×50.0	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 「蔵品目録」では作者は平沢屏山とされる	
800274	炉辺喫煙図 粉本	45.0×50.0	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 「蔵品目録」では作者は平沢屏山とされる	
800275	蝦夷島奇観 粉本	ニヨエン図	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 十五 五寸」の記載あり
800276	蝦夷島奇観 所に出ず図 粉本	とり獲て会	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 式 三寸」の記載あり
800277	蝦夷島奇観 家図 粉本	近蝦夷地居	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 十 四寸」の記載あり
800278	蝦夷島奇観 ラツコ図 粉本	イナウ図・	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「上巻 七 五寸」「イナウ」「八」の記載、「うす墨」の指定あり
800279	蝦夷島奇観 粉本	オンカミ図	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚
800280	蝦夷島奇観 粉本	とり獲て家	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 壹 初 壹尺一寸」の記載あり
800281	蝦夷島奇観 粉本	シャバウベ	23.5×31.4	一枚物 紙本墨書 1枚 「式」、裏面に「五 四寸」「タイシ」の記載あり
800282	蝦夷島奇観 粉本	ウカリ稽古	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚
800283	蝦夷島奇観 粉本	カ演奏図、	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「上巻 十三 四寸」の記載あり。器物に「うす墨」「赤」「アイ」「タイシヤ(代緒)」の色指定、カー(トンコリ)に「五本」の弦を示す注記がある
800284	蝦夷島奇観 粉本	弓矢鞆図	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「上巻 十口[三?] 五寸」の記載あり
800285	蝦夷島奇観 粉本	ウリリ	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「上巻 十壹 三寸」の記載あり
800286	蝦夷島奇観 粉本	塩製になし	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 四 式寸」の記載、一部朱塗り。左端に「ヲ、子ッ図」の一部あり
800287	蝦夷島奇観 粉本	イナウ削	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 五 壹尺七寸」の記載あり
800288	蝦夷島奇観 粉本	おっとせい	31.4×42.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 三 式寸」の記載、一部朱塗り
800289	蝦夷島奇観 粉本	女夷文手図	27.9×19.0	一枚物 紙本墨書 1枚 刺青に「アイ」の色指定、裏面「四 上巻 五寸」の記載あり
800290	蝦夷島奇観 粉本	サイモン図	27.9×19.0	一枚物 紙本墨書 1枚 「十六 下巻ヲハリ 四寸」の記載あり

資料番号	資料名	サイズ(cm)	資料詳細
山田繁造資料			
800291-001	微笑図	27.9×40.2	一枚物 紙本墨書 1枚 笑う男性の群衆図。輪郭線など、胡粉を塗り修正した跡がある
800291-002	諸肌女性図	27.5×19.8	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 坐る女性図。右側に男夷の顔も見える。800291-003・026と同じ構図、肌のみ着色。胡粉を塗り修正した跡がある
800291-003	諸肌女性図	27.6×19.7	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 坐る女性図。800291-002・026と同じ構図。肌のみ着色
800291-004	老男性図	38.9×27.5	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 老人の顔・頭部を描いた図。頭巾を被った人物と正面を向く人物は800291-021にも見える。肌・着衣の一部、頭巾の模様が着色される
800291-005	弓射動作図	28.0×39.0	一枚物 紙本墨書 1枚 弓矢を射る男性を様々な角度から描いた図。煙草を吸う姿も交じる
800291-006	表情図	27.9×40.3	一枚物 紙本墨書 1枚 男性の顔を繰り返し描き、女性も交じる。「幣奉る所をいふ」の書込がある
800291-007	酒宴図	27.9×39.9	一枚物 紙本墨書 1枚 酒宴の一場面か。熊皮を敷く人物、杖をつく老齢男性と器を掲げる人物の図
800291-008	漁場日常図	28.2×40.0	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 魚を手に持ちカゴに腰掛ける男性、立ち姿、坐った姿などが描かれる。着衣の一部着色
800291-009	酔婦図	28.0×40.0	一枚物 紙本墨書 1枚 酩酊して肩を組んで歩く図
800291-010	敷物動作図	28.0×40.0	一枚物 紙本墨書 1枚 敷物を巻く、敷く、運ぶ一連の動作を描く
800291-011	漁場作業（移動）図	28.0×40.0	一枚物 紙本墨書 1枚 魚を運ぶ男性たち。左端の人物は杖をつき帽子を被る
800291-012	沓（ケリ）図	28.0×40.1	一枚物 紙本墨書・着色 1枚 沓のみを描く
800291-013	オンカミ図	284×38.9	一枚物 紙本墨書 1枚 オンカミ図、子熊を抱く子供など描かれる。胡粉を塗り、修正した跡がある
800291-014	漁場作業（運搬動作）図	28.1×40.1	一枚物 紙本墨書 1枚 魚を集め、運び、背負い籠に入れる一連の動作が、上部には背負い籠が描かれる
800291-015	老人・親子人物図	28.0×40.1	一枚物 紙本墨書 1枚 帽子を被り杖をつく老人、物を運ぶ男児と老婆、毛皮を敷く女性と幼児が描かれる
800291-016	漁場作業図・日常動作図	28.0×40.0	一枚物 紙本墨書 1枚 身体を搔く男性などが描かれる
800291-017	漁場作業（諸動作）図	27.9×38.7	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 船漕ぎや船上での昆布採り、魚を運ぶ姿などが描かれる。脚や上半身のみ描かれた部分もある。肌の一部のみ着色
800291-018	山越（渡川）図	28.0×38.5	一枚物 紙本墨書 1枚 背景まで描かれおり、他の絵よりも下絵的である。左から「秋山鹿ヲ遠き坡ニ置 高遠ノ景 よし／三人尋ゆく 三人口□の地／柳樹あるべし」の詞書がある
800291-019	食事・物運図	28.0×40.0	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 食事や物を運ぶ男性図。肌の一部のみ着色。000291-024に同じ人物が見える
800291-020	漁場作業（運搬）図	28.0×40.0	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 魚を運搬する図など。余白には顔のみを描いた部分もある。肌および着衣の一部着色。胡粉を塗り修正した跡もある
800291-021	漁場諸動作・顔図	27.7×38.5	一枚物 紙本墨書 1枚 人物の動作や顔が繰り返し描かれる。人物の顔には800291-004に描かれた人物と同じ人物が見られる
800291-022	海上船漕図	27.8×39.5	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 船を漕ぐ姿、遠方には和船も見え、他の絵よりも下絵的である。肌および着衣、背景の一部が着色される
800291-023	漁場作業（運搬動作）図	28.0×40.1	一枚物 紙本墨書 1枚 歩み板の上で背負い籠に魚を入れて運ぶ男性の動作を描く
800291-024	喫煙・食事動作図	27.9×39.9	一枚物 紙本墨書 1枚 喫煙や食事する男性の動作を描く。000291-019に同じ人物が見える
800291-025	漁場作業図	28.1×40.0	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 表裏とも図が描かれる。踏み板から踏み外し魚の貯蔵場所に落ちる男性とそれを笑う男性。800291-032に類似した人物がみられる。「上に居て落たるを笑ふ声」「納保よりすへり落勢」「あゆみ板より落たる所也」「落たる所」の詞書がある
800291-026	諸肌女性図	27.5×39.6	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 表裏とも絵があり、座る女性が描かれる。000291-002・003と同じ構図。片面の女性の肌・唇のみ着色される。左から「ぬいなしも綿のこゆふのミ也 女夷の下衣の類也此上ニ厚子ヲきる／二十斗明るもあり或ハあけきるもあり 前ニ巾後ニ巾也 着用するニすそよりかふりてきるもの也／も綿ひとへ也 ○夏ハ一枚きるもあり／○是ニしかの皮のみか後ニしたるを 上りすそ皮でぬい付るあり／夏衣ノ下着也 冬ニキズ／[図説明]袖 袖 一巾已上 一巾已上」の説明書がある
800291-027	表情図	28.0×39.8	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 表裏とも図が描かれる。男性像に加え、笑うの顔のみが繰り返し描かれる。肌や唇の一部は着色される。右上から「歩行板より落つたるをわろふ／[右下]わろふ顔／[中央下]此女夷前曲図所為の行ひより見合も□□ 女ニみみかねあるもなきも とりどりニしたるケよし また連々舞りけたるも 同しおちたき□しものもか頭巾なども落すへし 歩行板よりおちたるを笑ふ勢、尤行画のことし」との書込がある
800291-028	輪舞（リムセ）図	27.9×21.4	一枚物 紙本墨書 1枚 リムセ図、800291-029につながる。胡粉を塗り輪郭を修正した跡。下部にも顔や脚のみが描かれる
800291-029	輪舞（リムセ）図	27.9×18.9	一枚物 紙本着色 1枚 リムセ図、800291-028につながる。胡粉を塗り輪郭を修正した跡。肌の一部のみ着色
800291-030	山越（渡川）図	28.5×40.1	一枚物 紙本墨書 1枚 川を渡る男性たちの図。背景まで描かれており下絵的である。胡粉を塗り修正跡がある。3人の男性のうち2人は、800291-038に同じ人物が見える
800291-031	男女図	40.2×28.0	一枚物 紙本墨書 1枚 杖をついて薪を運ぶ老男性と側らを歩く老婆の図。「老婆長曾より八分斗もひくさまよし 男夷の左りの足揃ふ也 尚斗長くすべし」の書込がある

資料番号	資料名	サイズ(cm)	資料詳細
800291-032	漁場作業（運搬）・表情図	40.0×28.1	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 歩み板を踏み外し魚の貯蔵場所に落ちる男性、魚を運ぶ女性、繰り返し老婆の顔が描かれる。肌や唇、魚など一部が着色される。左から「此姿ヲ画方宜／髪多ク画コト悪シ賤ゲナルナリ雅ナルヲ好ムヘシ／ヲタフクノ面ニスヘシ人中画ヘカラズアルハアシ也／ロノ入墨ナキモヨシ又アルモ宜 点シガタキモノナリ□ニテ洒落ニ一点アルカ／□□ニ少シ青ヲカケル軽ク画クヘシ／[下左より]女夷カタヲノカセテ両袖ヲ前ノ服ノ處ヘカキ込ミテツボウノ下衣ヲアラハシタルカヨシ○シリハ大キク画 老女ハ格別ナリ○ロハフチニ入墨ヲスル故格好ヨリ小ニ画方ヨシ○ヲヲキ中ニハレクテムヲカケタルモアルベシ耳金モアルモアリナキモアルカ宜シ男女トモニ○男夷ニ魚ヲナゲツケルル写意ナリ」の書込がある
800291-033	喫煙図	39.2×27.5	一枚物 紙本墨書 1枚 煙草を吸う男性図。顔や目などが余白に書かれる。煙草入れは胡粉を塗り書き直される
800291-034	男女図	40.3×28.2	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 杖について歩く男性と女性図。肌の一部が着色され、朱線による輪郭の訂正がある。「○此頭巾の上へ紐をはられたるハあしく頭巾の顔には隠れたるがよろし ○頭巾なきととも半口ならよし両方とも隠れたるハ悪し」の書込がある
800291-035	顔図	27.4×39.0	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 男性の顔や頭、頭巾などが描かれ、肌・衣服の一部が着色される
800291-036	喫煙動作図	28.3×40.0	一枚物 紙本墨書 1枚 たばこを吸う男性と頭巾を被った老男性の図。胡粉を塗り輪郭を修正した跡がある。中央の男性図は別紙貼付のうえ描かれている
800291-037	山越人物動作図	38.8×27.8	一枚物 紙本墨書 1枚 杖について歩く男女、たばこを吸い休憩をとる男性など、山越えの様々な場面が描かれる。800291-030の人物に構図は異なるが、同じ顔の人物が見られる
800291-038	山越人物動作図	28.5×40.3	一枚物 紙本墨書 1枚 杖について歩く男性の様々な図案と煙草を吸う頭巾の男性が描かれる。胡粉を塗り輪郭を修正した跡がある。800291-030に同じ人物が見える
児玉コレクション			
K-H13-0450-01-01	蝦夷島奇観 粉本 シトキ図	27.1×37.9	一枚物 紙本墨書 1枚 「上巻 六 式寸」の記載あり。「スミ」「アイ」「アサキ」の色指定入り
K-H13-0450-01-02	蝦夷島奇観 粉本 列坐 粉本	27.0×37.7	一枚物 紙本墨書 1枚 「上巻 九 四寸」の記載あり。頭髮に「白」、衣服に「赤」「アサキ」等の色指定入り
K-H13-0450-01-03	[蝦夷島奇観] 粉本の一部 踏舞図	27.0×38.1	一枚物 紙本墨書 1枚 「上巻 十四 四寸」の記載があり。「蝦夷島奇観」の一部か。800266に連続する図
K-H13-0450-01-04	蝦夷島奇観 粉本 花矢を射る図	26.8×38.0	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 六 五寸」の記載あり
K-H13-0450-01-05	蝦夷島奇観 粉本 挟殺の図	26.9×38.2	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 七 式寸」の記載あり
K-H13-0450-01-06	蝦夷島奇観 粉本 カムイ・ノミ図	26.9×38.2	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 八 六寸」の記載あり
K-H13-0450-01-07	蝦夷島奇観 粉本 酒宴図	26.9×37.6	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 九」の記載あり
K-H13-0450-01-08	蝦夷島奇観 粉本 西夷地居家図	26.8×38.1	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 十一 式寸」の記載あり
K-H13-0450-01-09	蝦夷島奇観 粉本 家居宝械図(家屋内部)	27.0×38.1	一枚物 紙本墨書 1枚
K-H13-0450-01-10	蝦夷島奇観 粉本 マチコル図	27.0×27.0	一枚物 紙本墨書(一部朱塗り) 1枚 「下巻 十三 五寸」の記載あり
K-H13-0450-01-11	蝦夷島奇観 粉本 おっとせいに銚を打ち込む図	27.0×38.0	一枚物 紙本墨書 1枚
K-H13-0450-01-12	蝦夷国漁場風俗図巻(オムシヤ図) 粉本	27.5×114.7	一枚物(3枚継) 紙本墨書 1枚 小玉貞良「蝦夷国漁場風俗図巻」(南オーストラリア州立美術館)に似る
K-H13-0450-02-01	蝦夷国風図絵(熊狩図) 粉本	28.0×39.9	一枚物 紙本墨書 1枚 小玉貞良の蝦夷国風図絵の系統に似る
K-H13-0450-02-02	蝦夷国漁場風俗図巻(地曳き網図) 粉本	28.0×77.4	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 小玉貞良「蝦夷国漁場風俗図巻」(南オーストラリア州立美術館)に似る
K-H13-0450-03	蝦夷国漁場風俗図巻(荷渡図) 粉本	30.8×46.5	一枚物 紙本墨書 1枚 「十四」の記載あり 小玉貞良「蝦夷国漁場風俗図巻」(南オーストラリア州立美術館)に似る
K-H13-0450-04	操船図 粉本	27.2×38.7	一枚物 紙本墨書 1枚 左の男性は小玉貞良「蝦夷国漁場風俗図巻」(南オーストラリア州立美術館)に似る
K-H13-0450-05	地曳き網図 粉本	39.3×59.7	一枚物(4枚継) 紙本墨書 1枚 樹木の配置などは異なるが、小玉貞良「蝦夷国漁場風俗図巻」に似る。波の描き方は貞良ではなく屏山風
K-H13-0450-06	宝物検分図 粉本	29.5×42.0	一枚物 紙本墨書 1枚 「四口 夷宝ヲ見トルツ」顔立ちは小玉貞良風
K-H13-0450-07	男女出獵図 粉本	82.0×48.7	一枚物(5枚継) 紙本墨書 1枚 「男女出獵図 粉本」(800263)、妻沼コレクション(北海道博物館 収蔵番号126271)はほぼ同じ構図。「男女出獵図 粉本」(800262)」とも同系統の図
K-H13-0450-08	荷造図 粉本	55.5×39.7	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 構図は「荷造図 粉本」(K-H13-450-09)にも似る。サイズから描画段階の違いなのか。顔立ちは雪好風
K-H13-0450-09	荷造図 粉本	79.2×28.8	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 天地を示す「上」の記載、裏面に「ソウヤ 請負人 藤野喜兵衛」「インカリ請負人 阿部屋 傳治郎」の記載がある。構図は「荷造図 粉本」(K-H13-450-08)にも似る。サイズから描画段階の違いなのか。顔立ちは雪好風
R01-0003-001	おひょう漁図 粉本	32.0×68.0	一枚物 紙本墨書 1枚 一部輪郭線朱書き、人物は表裏両面から書かれる。鶴図粉本(R01-0003-002、一枚物 紙本墨書 1枚)附属か



800279 (山田)

7・8番
800278 (山田)

6番
K-H13-0450-01-01 (児玉)

5番 800281 (山田)

4番 800289 (山田)



15番 800264 (山田)

14番 800266 (山田)
・K-H13-0450-01-03 (児玉)

13番 800283 (山田)

12番 800265 (山田)

11番 800285 (山田)

9番
K-H13-0450-01-02 (児玉)



7番
K-H13-0450-01-05 (児玉)

6番
K-H13-0450-01-04 (児玉)

5番 800287 (山田)

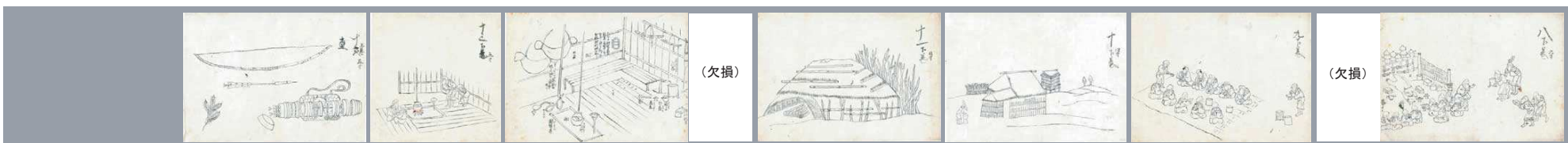
4番 800286 (山田)

3番 800288 (山田)

2番 K-H13-0450-01-10 (児玉)

K-H13-0450-01-11 (児玉)

1番 800280 (山田)



800284 (山田)

13番 K-H13-0450-01-10 (児玉)

K-H13-0450-01-09 (児玉)

(欠損)

11番
K-H13-0450-01-08 (児玉)

10番 800277 (山田)

9番
K-H13-0450-01-07 (児玉)

(欠損)

8番
K-H13-0450-01-06 (児玉)



16番
800290 (山田)

15番 800285 (山田)

800282 (山田)

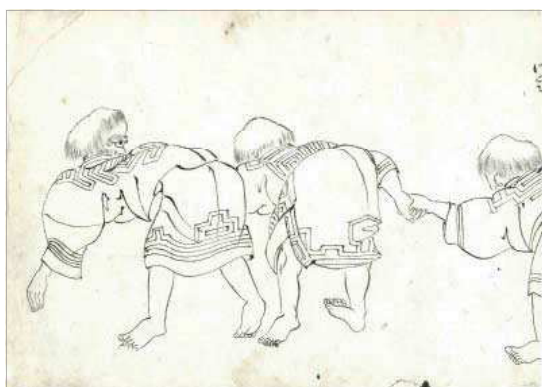
「蝦夷島奇観」粉本 番号順復元図

-45-045)。残念ながら、本図には作者の特定につながる款記や印章は付されていないが、粉本との対応関係を示したのが『『蝦夷島奇観』・粉本比較図』(34~35頁)である。

粉本の余白に記載があるように、上下2巻ではなく、前掲の「復元図」の順序とは



蝦夷島奇観(H10-0051-45-045)のオンカミ図



粉本(800279)



一般的な「蝦夷島奇観」のオンカミ図
(K-H13-0443-3)

若干異なっていること、800264の一部、800265、800266・K-H13-0450-01-03、K-H13-0450-01-11に対応する場面がないこと、その他、細部には異なる部分はあるが、全体的な描写はほぼ一致している。特に、「蝦夷島奇観」の模写においては、800279のオンカミ図は、人物の側面もしくは正面から描かれるのが一般的であり、本図のように背面から描かれる構図はめずらしい。本図に関していえば、粉本では先頭の人物が振り返って後ろを向いていて、完成作品では他の人物同様後頭部が見えるのみである点を除けば、先頭の人物の上半身のバランスが不自然である点を含めて一致している。

4 それぞれの粉本の描写内容と作者

これまで3つのグループとして捉えていた粉本は、実は、(1) 下絵資料(山田繁蔵旧蔵資料・児玉コレクション)と(2) スケッチ資料(平塚常次郎旧蔵資料)の2つであったことが確認できた。以下は、この2つのグループの描写内容に着目して、それぞれについてまとめてみたい。

(1) 下絵資料

粉本も、下絵として自ら構図を考えたものか、他者の作品を模写した模本なのかによって、その意味が異なるため、残された粉本と類似した作品を比較することも単純ではない。

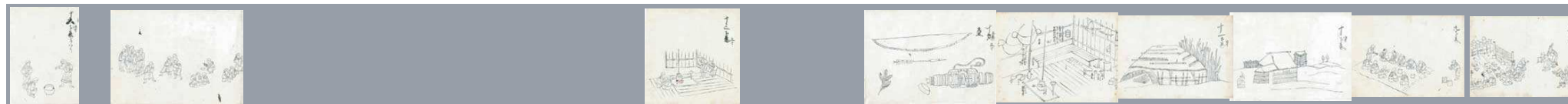
しかし、現在残されている粉本の描写を、類似する作品を基本として、絵師ごとに分類、その系統関係を考えることもまた、アイヌを読み解く上では有効と考えられるため、分類を試みた。他機関や個人が所蔵するアイヌ絵については、アイヌ絵にかかる著作・展示図録等のできる限りの把握に努めたが、筆者が未熟であり、主観をもとに分類したため、正確でない部分もある。また、アイヌを描いた多くの作者のなかで、



800264 800285 K-H13-0450-01-02 800279 800278 K-H13-0450-01-01 800281 800289



K-H13-0450-01-05 K-H13-0450-01-04 800287 800286 800288 K-H13-0450-01-10 K-H13-0450-01-11 800280 800283



800290 800282 K-H13-0450-01-10 800284 K-H13-0450-01-09 K-H13-0450-01-08 800277 K-H13-0450-01-07 K-H13-0450-01-06



K-H13-0450-01-11 800266 · K-H13-0450-01-03 800265

画中には使用されなかった粉本

「蝦夷島奇観」・粉本比較図

名前や履歴が明らかとなっている作者はごく一部であるため、分類はあくまでも傾向を見るためのものである。作者が明らかでなくとも、前述の蝦夷島奇観のように、粉本を元にした作品がある場合は、それを一つのまとまりとした。

小玉貞良

K-H13-0450-01-12、K-H13-0450-02-02、K-H13-0450-03 蝦夷漁場風俗図巻（南オーストラリア州立美術館）

K-H13-0450-02-01 蝦夷国風図絵屏風（公益財団法人アイヌ民族文化財団）

K-H13-0450-06？

雪好

800262、800263

K-H13-0450-07、K-H13-0450-08～09？

千島春里

800267、800268

蝦夷島奇観

800264～266、800275～290

K-H13-0450-01-01～11

平沢屏山[屏風]

800269～800274

その他

K-H13-0450-04、K-H13-0450-05

これらを概観すると、K-H13-0450-01-12やK-H13-0450-02-02は小玉貞良の蝦夷国漁場風俗図巻(南オーストラリア州立美術館)そのもの、800262・800263・K-H13-0450-07は明らかに雪好作品に類似しており、このグループには少なくとも様々な作者につながる粉本が含まれていることがわかる。

また、800270～800274については、粉本を元にしたと思われる屏風を確認することができた⁽¹¹⁾。この屏風は、場所請負人藤野

男女出獵図 粉本(K-H13-0450-07)と男女出漁図(H10-0051-45-029)



(上)蝦夷国漁場風俗図巻(部分)(南オーストラリア州立美術館)、(下)粉本(K-H13-0450-01-12)



松本家旧蔵屏風と粉本の関係

屏風写真は林昇太郎(当時、北海道開拓記念館)調査資料による。残念ながら屏風全体を写した写真がないため、各面の順序は不明である。

屏風の上・下6点は当館所蔵の粉本の一部

左上から800273、800272、800270、800271、800269、800274

左「アイヌ風俗十二ヶ月屏風」4月「家族団らん図」



松本家旧蔵屏風の
印章部分拡大

家の持船で、松前藩の御用船でもあった長者丸の船頭を務めた松前町の松本家が所蔵していたものである⁽¹²⁾。印章部分を拡大すると「平澤氏」印があり、平沢屏山の作品であることを確認できる。

屏山との関係性でいえば、800274は「ア

イヌ風俗十二ヶ月屏風」の4月、「家族団らん図」の一部にも似ており、従来から屏山との関係性は指摘されていたし⁽¹³⁾、「(函館某家蔵)平沢屏山の粉本(但し裏打あり) 蝦夷島奇観 蝦夷国風図絵の模写を企てたもの」との箱書きや、「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」(市立函館博物館 1981年)で、800269～800274の作者が平沢屏山とされていたことはすでに触れた通りである。

アイヌ絵研究の先達、越崎宗一氏は、1936年（昭和12）に発表した著作のなかで、平沢屏山について、「今でも函館の古老達は屏山の話が出ると絵馬屋といふ、彼の人達にとって頗る懐古的な名であるらしい、然し絵馬屋を知ってる人もだんだん少なくなった、況して絵馬屋を見たといふ人は殆んど居なくなつた、私は絵馬屋を知ってるといふ人を力めて訪問して色々の事を尋ねるのであるが復聞きの話が多く頗る不正確で何時も失望する。」⁽¹⁴⁾と、1876年（明治9）の屏山没後60年を経た当時の屏山像を伝えている。

箱書や目録の記載事項は、いずれも、越崎氏が記録した屏山像が市中で伝えられるなかで、後世に付されたものであることを考えると、明確な根拠にはなり得なかったが、新たに屏山の屏風が確認できたことから、山田繁蔵資料および児玉コレクションに含まれた一連の粉本群は、少なくとも屏山本人の手による粉本を含み、小玉貞良や雪好などの他の絵師に比定される粉本については、屏山が模写したものもしくは他の絵師の粉本を所持していたものと言うことができる。

（2）スケッチ資料

本資料群の描画内容が、「下絵資料」とは明らかに異なることはすでに述べた通りである。

本資料群については、同一系統と見られる「林家旧蔵アイヌ風俗画画稿」を小樽市総合博物館が所蔵している⁽¹⁵⁾。これらは、ヨイチ場所の請負人であった林家旧蔵で、アイヌ風俗に関係する32枚の絵と1冊の画帖を含み、時期は幕末と見られている。このスケッチを描いた人物は明かではないが、「波洲」の銘のある作品を模写した同一作者と見られる作品が含まれていることから、蠣崎波響につながる「波」を冠した

絵師の可能性や、1860年（万延元）の東西蝦夷地の東北諸藩への分領化に際し、作成されたと見られる「スツツ・シマコマキ分界絵図」「スツツ御陣屋の図」が含まれていることから、場所引渡のための絵図面の作成に従事した画工の可能性などが指摘されている。

なお、波洲については、すでに触れた松本家の調査資料のなかにも、「波洲」の落款に加え、「穂積重盈」の印章のある作品写真が確認できた。現状では、不明な点が多い絵師であるが、新たな手がかりとなることを期待したい⁽¹⁶⁾。

小樽・函館の粉本とも、一部に下絵もしくは他の作品を写したとみられる絵もあるが、当時としてはめずらしい「写生」を含み、「従来画題としてとりあげられることが少なかった、アイヌ文化、特に生活風俗に関する絵が多く含まれています。」⁽¹⁷⁾と指摘される通り、漁場の日常風景など、これまで紹介されてきた完成作品にはない、生き活きとした姿・表情が描かれており、他のどの作品よりも伸びやかなアイヌの姿を見ることができる。

「波洲」の落款と「穂積重盈」の印章（林昇太郎調査資料より）

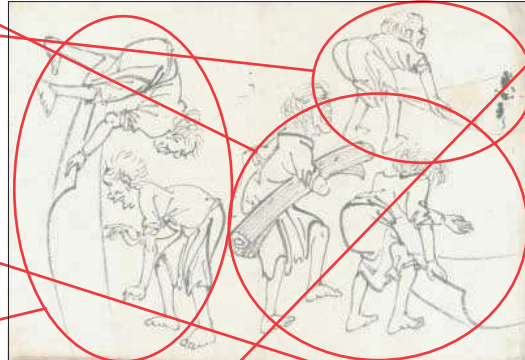




800291-016



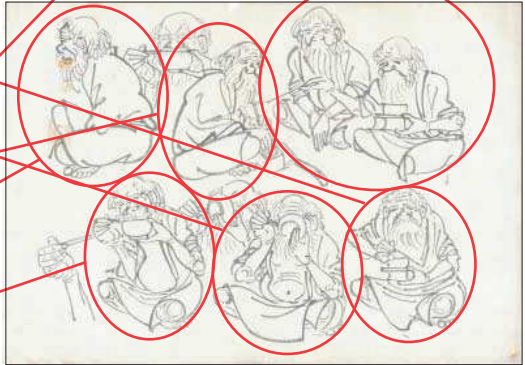
800291-019



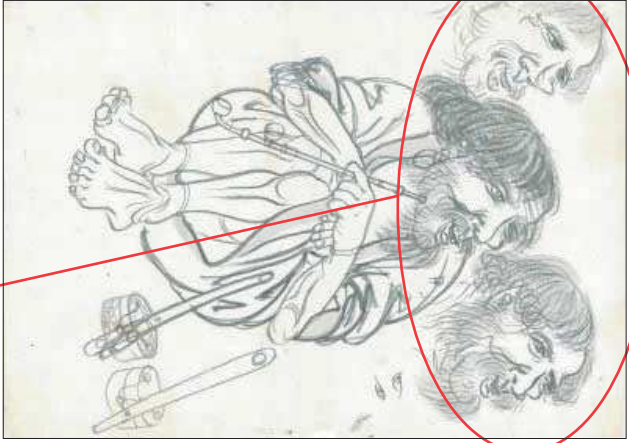
800291-010



800291-031

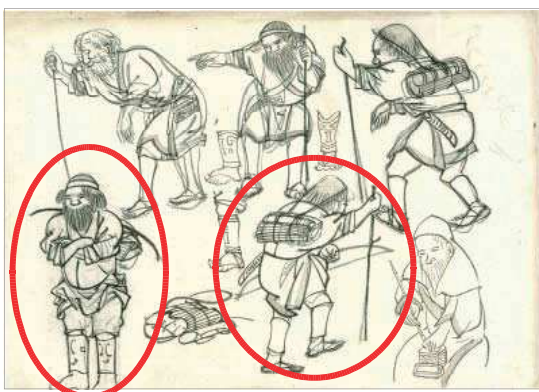
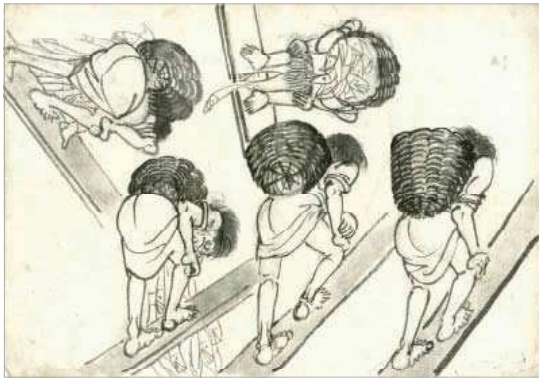
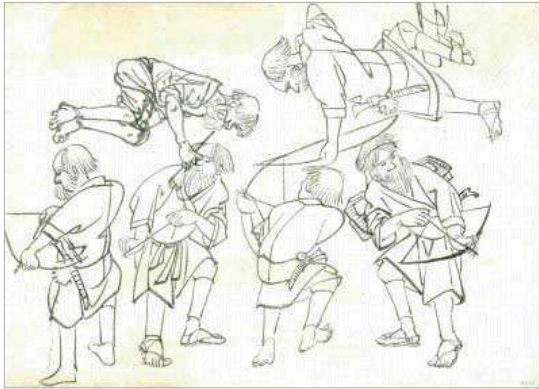


800291-024



800291-033 (反転図)

図案集的なもの



(上から)800291-005・023・036・038

下絵的なもの



(上から)800291-018・030

詞書き



800291-034

「○此頭巾の上へ紐をはられたるハあしく頭巾の顔には隠れたるがよろし ○頭巾なきとも半口ならよし 両方とも二隠れたるハ悪し」などの詞書きのほか、足などを朱書きで訂正したような部分も見られる。

53 老漁師の図、50 オムシャの老夫婦図(小樽市総合博物館)とアイヌ人物二曲屏風(大塚和義氏蔵)



53 老漁師の図、42 脚絆を履く男性図、55 櫛を持つ男性図、44・54 弦張の図(小樽市総合博物館)と千島春里「アイヌ人物図」(公益財団法人アイヌ民族文化財団)。アイヌ人物図については、北海道博物館所蔵の妻沼コレクション「蝦夷風俗図」と構図が重なるものが複数存在している。



すでに、石川直章氏（小樽市総合博物館）や五十嵐聡美（北海道近代美術館）らによって指摘されている内容も含めて、あらためて粉本を見てみたい。

なお、小樽市総合博物館所蔵資料の番号・名称については、「小樽市博物館紀要」第19号掲載の「林家画稿一覧」によった。

「35 男性図集」には多くの男性アイヌが描かれているが、図（39頁）で示した通り、全く同じ構図の絵が函館の粉本に複数見られることから、すでに指摘されている通り、函館・小樽のこの粉本については少なくとも同一の作者の絵を含むものと言える。さらに、本資料群については、鯨場の作業風景が描かれている点が特徴的であり、内容・作風とも両館に類似した資料が存在することが確認できる。

また、本資料には、一部に詞書きが付されているが、当館所蔵分資料にかかる内容は、市立函館博物館所蔵アイヌ絵粉本一覧（28～30頁）の通りである。図に描かれた物や場面の説明とともに、絵を描くときの注意が記されており、朱で訂正した跡も見られる。

描写内容は、「全体的に見て林家のもの [=小樽市総合博物館蔵] は、試行錯誤しながら幾本もの線を引いていますが、函館博物館の方は、軽妙な線でまとめています。……林家のものは第一段階の写生であり、函館のは整理を加えた第二段階の写生となります」⁽¹⁷⁾と指摘される通りである。

とはいえ、「整理を加えた第二段階の絵」と見られる函館の粉本にも異なる描画段階の絵が見られる。

例えば、800291-005・023・036・038（40頁参照）のように、弓矢を射たり、魚を運んだり、煙草を吸ったり、山歩きなどの一連の動作を描いた図案集的なものから、800291-018・030のように構図が固まって背景まで描き込まれた粉本もある。実際、

800291-030の中央に描かれた人物と腕組みをする人物は、800291-038の中央下の人物の反転図、左端の腕組みする人物は全く同じであり、800291-038の図案を用いて、800291-030のような下絵を描いたものと考えられる。

なお、これらの粉本は、ほぼ同一の作者として見てよいという見解があり、概ね賛成できるが、描き方が異なるように見えるものがあること、書き入れられた文字は明らかに異なる筆跡が存在することから、別の作者のものが混入している可能性も現段階では否定できないものと考えられる。

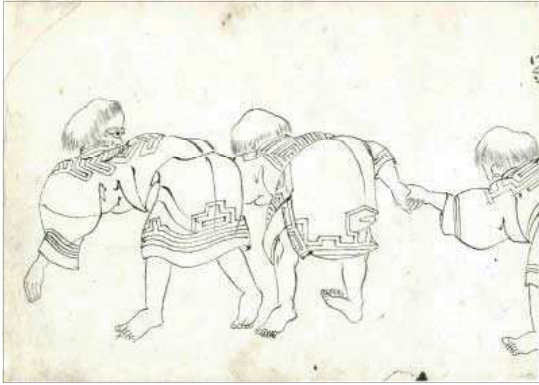
これらの粉本につながる作品については、小樽の一部資料の余白に書き入れられた「蝦夷人十二之内其老」（53 老漁師の図）などの番号から十二面の六曲一双屏風を描こうとした可能性が指摘されているが⁽¹⁷⁾、「53 老漁師の図」、「50 オムシャの老夫婦図」については、大塚和義氏が所蔵するアイヌ人物二曲屏風に酷似している。残念ながら、六曲一双ではない二曲屏風であるが、色濃い関係性を読み取ることができる。また、この粉本については、波嶋や千島春里に類似した構図が、複数見られることも指摘されている通りである（41頁参照）。

5 交叉する粉本

これまでは、函館博物館が所蔵する粉本には、（1）下絵資料と（2）スケッチ資料の2種があり、それぞれの特徴を見てきたが、この2種の間にも関係性を見い出せる部分が存在する。

下絵資料の800279、スケッチ資料のうち函館の800291-013、小樽の「50 オムシャの老夫婦図」といった描写である（43頁参照）。

この「オンカミ図」と同様の描写については、先に挙げた「アイヌ人物二曲屏風」



800279



800291-013



50 オムシャの老夫婦図(小樽市総合博物館)

(大塚和義所蔵)のほか、波嶋「アイヌ人物六曲一双屏風」(東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館)、波静「蝦夷人物六曲一双屏風」との類似が指摘されており⁽¹⁸⁾、ここでも「波」につらなる絵師の存在が明らかとなっている。

これまでの研究では、対象としては重視

されてこなかった「波」を冠する絵師たちの系譜が見えてきたことは、アイヌ絵師の系譜関係を考える上では新たな課題であり、興味深いところである。

6 粉本を読む

残された多くのアイヌ絵を見て、比較してみると、従来からアイヌ絵の描き手、特に町絵師は、時には工夫して独自の構図を編み出すこともあったが、基本的にはパターン化した粉本を駆使しながら、多くの注文に応じて絵を描いた姿が浮かんでくる。加えて、異なる作者間でも類似した構図の作品が多く残されていることから、模写や、時にはその粉本が他の絵師たちに受け継がれているのではないかと、この可能性も指摘されている⁽¹⁹⁾。

本稿も含め、これまでの論考でも、粉本は風俗画としてはもちろん、残された作品とあわせて読み解くことで、不明な点の多い絵師の活動や社会のなかでアイヌ絵が担った役割や位置づけなど、他の資料では補うことができない素材の1つとして注目されてきた。

これまで見てきた通り、下絵資料のなかには、小玉貞良や雪好などの複数の絵師に比定できる粉本が一括して存在し、平沢屏山が所持していた可能性が高いことを確認した。これは粉本と粉本によった作品について、これまでの指摘を具体的に裏付けるものといえ、粉本が、アイヌ絵を読み解くうえでの、とくに系譜関係を明らかにするうえでは欠かせない資料であることを物語っている。

さらにもう1つ、粉本から読み取ることができる、アイヌ絵が生み出された背景、当時の社会の中での意味、位置づけを知る手がかりについて紹介したい。

800262の余白には、「子モロ請負人 藤野喜兵衛」「ソウヤ請負人 藤野喜兵衛」



山田繁造旧蔵資料 800262 (左)
見玉コレクション K-H13-0450-01-03 (右)



「イシカリ請負人阿部屋傳次郎」の書き込みがあり、全く同じような記載が、K-H13-0450-09の余白にも見られ、「ソウヤ請負人藤野喜兵衛」「イシカリ請負人 阿部屋傳治[次]郎」の書き込みがある。

阿部屋（村山家）は、石川県能登の出身で元禄期に蝦夷地に渡ったとされる場所請負人、藤野家は、初代が喜兵衛が天明期に蝦夷地に渡り、代々柏屋を屋号として活躍した近江商人（場所請負人）である。この粉本の書き込みを文字通りにとり、平沢屏山が関係している絵であることを考えると、屏山の活躍した時期、箱館に渡った1844年（弘化年間）から1876年（明治9）まで、かつ場所請負制度が終焉する1869年（明治2）までの間ということになる。加えて、あくまでも可能性の話ではあるが、800262については、藤野喜兵衛が根室場所（子モロ）を請け負った、1849年（嘉永2）以降で、村山伝次郎が石狩場所の請負を罷免さ

れ、同場所が幕府の直轄とされた、いわゆる「石狩改革」のあった、1858年（安政5）までということになる。

アイヌ絵師と商人との関係については、アイヌ絵の元祖、小玉貞良「松前・江差屏風」の所蔵者が近江商人であること、「蝦夷国漁場風俗図巻」（南オーストラリア州立美術館）には、巻末に登場する和人の袖に、萬屋宮川清右衛門（近江商人）を示す「ヤマジュウ」の屋号が描かれていることから、注文主としての近江商人が浮かび上がり、蝦夷地の産物とともに情報、つまりアイヌ絵を求める人たちへの仲立ちをしたのが、近江商人であったとの指摘がある⁽²⁰⁾。

福島屋杉浦嘉七は、平沢屏山を支援し、屏山は杉浦の請け負っていた十勝や幌泉を訪れ、アイヌを描写したことが知られる。そして屏山は、「神祈り図屏風」（ドイツビーティヒハイムービッシンゲン市立博物館）や「熊送り図」（国立スコットランド

博物館)などの遠景に福島屋の帆印「リョウテンビン」の弁財船に描き、絵の中にその関係性を残している⁽²¹⁾。さらに屏山は、オムシャについても、多くの作品を遺しているが、この場面が描かれた意図を考えたとき、場所請負人が商売宣伝のために描かせた可能性が大きいことも想像に難くない⁽²²⁾。

これらのことを踏まえると、粉本に描き込まれた、「藤野喜兵衛」「阿部屋伝次郎」は注文主と見るのが自然である。

なお、杉浦嘉七は、箱館奉行御用達、箱館産物会所御用達も務め、1860年(万延元)、幕府から東北諸藩へ、蝦夷地を分割・分領化する際の場所仮引渡業務に従事し、絵図面を作成するために、画工(絵師)を連れていたことが紹介されており、松前藩や幕府、そしてその支配のもとで活動していた場所請負商人と絵師との関係性が垣間見える⁽²³⁾。「北海道史人名辞彙」(河野常吉編

北海道出版企画センター 1979年)には、1878年(明治元)にロシア領事が屏山に絵の執筆を依頼したとき、「遅延甚だしきを以て、遂に運上所に依頼し屏山に厳談して筆を執らしむ」との記載があり、箱館奉行御用達であった杉浦が仲介者として関わったことを示唆する記述もある。同様に、屏山作「種痘施行図」の跋文に「箱館商人杉浦嘉七者令画工図其状以献村垣公」とあり、杉浦が屏山に描かせて、箱館奉行であった村垣範正に献上したことが記されており、ここにも絵師と商人、商人と幕府(時には松前藩)といった関係性を見ることができる⁽²²⁾。

アイヌ絵が描かれた18世紀から19世紀は、国内産業が発展、「北前船」に代表される商人による活動が活発化して、蝦夷地が日本に組み込まれていく過程でもあった。人や物の動きに連動して情報としてのアイヌ絵が求められたが、松前藩が蝦夷地

を支配していた時代は、アイヌ絵は市場としての松前で描かれた。幕府の直轄期には、その舞台は箱館に移り、アイヌ絵師平沢屏山を生んだ。その結び目のひとつが商人であり、絵師が商人を媒介として活動していたことはすでに紹介してきたように、想像に難くない。

アイヌ絵が、まさに時代の求めた産物であることを考えると、「アイヌ絵研究のひとつの焦点は、描かれたアイヌ民族の姿にあるのではなく、描いた日本人にあるのであって、その多様な視点を偏りなく読みとき、総合的なアイヌ研究が必要である」⁽²⁴⁾との言は、今後の研究の方向性を示しているのではないだろうか。

そのためには、「美術作品として、もしくは美術資料としての検討のほかに、この資料[粉本]では文書資料としての検討が必要である」⁽²³⁾との指摘は、当然のこととも言える。

本稿では、当館が所蔵するアイヌ絵の粉本にかかる報告を主としたが、当館のアイヌ絵はもちろん、開拓使収集の生活用具を含めたアイヌ関係資料全体を概観したとき、寄贈者や旧蔵者として商人の名前が多いことに気付く⁽²⁵⁾。アイヌ絵を総合的に読み解くためには、これらの資料の履歴を調査するなど、新たな側面からのアプローチも必要と考えられるが、これについては調査不足もあり、今後の課題としたい。

なお、今回報告の対象とした粉本とは直接の関係はないが、児玉コレクションに含まれるアイヌ絵の中に、林家が関係していたらしい絵巻2点を確認した。

1点は、「アイヌ絵巻」(卷子本1巻、H10-0051-45-039、内容は小玉貞良の写)で、1901年(明治36)の時点で富田厚積(1836年~1907年 鷗波 越前福井藩士。幕末から明治時代の儒者)の手にあったことが判



(上)下は上図の部分
拡大 儀礼に使う漆器
の様式まで細かく描き
込まれている

軸の裏面に押されてい
る印章

「蝦夷島奇観」
(K-H13-0444)



明している資料である。この巻物は木箱に
収められていて、その側面に時代は新しい
と見られるが、ペン書きで「アイヌ絵」、鉛
筆書きで「竹屋ヨリ買」と書かれた紙製ラ
ベルが貼付られていることから（竹屋は林
家の屋号）、いつの時点かは分からないが
林家が所持していたものと考えられる。

また、もう1点は、「蝦夷島奇観」（巻
子本1巻 K-H13-0444）で、表装の裏側
に朱文方印「余市〔ヤマジョウ〕林改」
・黒文方印「松前〔ヤマジョウ〕竹屋
金銀不用」が押されていた⁽²⁶⁾。落款や印
章は付されていないが、他の蝦夷島奇観に

比べると、漆器の蒔絵などに至るまで、金
泥で細やかに描かれていて、大英博物館所
蔵の平沢屏山「蝦夷風俗絵巻」に酷似して
いることから、平沢屏山の手によるものと
考えられる資料である。

これら2つのアイヌ絵もまた、林家との
つながりを示していることは、絵師と商人、
の関係性を考える上で興味深い。

注

- (1) 開拓使が収集した「函館博物館旧蔵資料」
については、大矢京介「函館博物館旧蔵資料
ラベル考」（特別展展示図録「千島樺太交換
条約とアイヌ」2015年）、馬場コレクション
については、長谷部一弘「馬場コレクション
研究—市立函館博物館所蔵アイヌ民族資料い
わゆる「馬場コレクション」について—」（「市
立函館博物館研究紀要」第2号 1992年）、
児玉コレクションについては、大矢京右「児
玉コレクションの収集経過とその周辺」（「市
立函館博物館研究紀要」第27号 2017年）、
椎久コレクションについては、大矢京右・大
野徹人「市立函館博物館所蔵『椎久コレク
ション』—八雲アイヌの民族資料とアイヌ語
音声—」（「北海道立アイヌ民族文化研究セ
ンター研究紀要」第19号 2013年）のほか、
「市立函館博物館蔵品目録1 民族資料篇」
（1979年）、「児玉コレクション目録 II ア
イヌ民族資料編」（1987年）、「カラフトアイ
ヌのひげべら 国指定重要民俗資料『アイヌ
の生活用具コレクション』整理報告書第1篇」
（1974年）、「北海道アイヌのひげべら 国指
定重要民俗資料『アイヌの生活用具コレク
ション』整理報告書第2篇」（1976年）、「アイ
ヌの喫煙用具 国指定重要民俗文化財『アイ
ヌの生活用具コレクション』整理報告書第3
編」（1977年）、「アイヌの服飾品 国指定重
要民俗文化財『アイヌの生活用具コレクシ
ョン』整理報告書第4編」（1978年）、「アイヌ
の狩猟用具・その他 国指定重要民俗文化財

- 『アイヌの生活用具コレクション』整理報告書第5編』などの目録が刊行されている。
- (2) 本稿では、アイヌが描かれた絵の呼称として「アイヌ絵」を用いた。函館博物館におけるアイヌ絵収集の概要については、「市立函館博物館アイヌ絵一覧」(本稿49頁)で簡単に紹介している。
- (3) アイヌ絵は、美術工芸、民族、歴史など多様な分野で登録されているため、現在、筆者が把握できる範囲でまとめたものである。図録発行後の2019年、新たに児玉家から3点のアイヌ絵が寄贈された。このため、図録で掲載した「市立函館博物館所蔵アイヌ絵一覧」に新たに寄贈された3点を加えるなど、再編集した資料一覧を本稿末(49頁～)に再掲した。
- (4) 「粉本」については、収蔵資料展「描かれたアイヌ ―市立函館博物館所蔵資料に見るアイヌの姿―」(2018年9月29日～2019年6月2日)のほか、「謎の笑うアイヌ絵」(2014年11月18日～2015年8月30日)、「市立函館博物館報サラニップ」No. 56(2017年3月31日 市立函館博物館)、道南ブロック博物館施設等連絡協議会のコラムリレー (<https://dounan.exblog.jp/23296747/>)等で紹介してきた。
- (5) 大矢京右氏から提供いただいた聞き取り調査結果、1969年12月9日付「北海道新聞」による。
- (6) 「市立函館博物館友の会30周年記念誌」(市立函館博物館友の会 2001年)
- (7) 筆者聞き取り。
- (8) 1957年6月8日付「読売新聞」、6月16日付「北海道新聞」、12月9日付「北海道新聞」
- (9) 児玉コレクションの寄贈経過については、前出、大矢京右「児玉コレクションの収集経過とその周辺」が詳しい。
- (10) 本一覧は本論考末の「市立函館博物館所蔵アイヌ絵一覧」を抜粋して再編集した。
- (11) 北海道立近代美術館の五十嵐聡美氏から提供いただいた写真がきっかけとなった。もとは北海道開拓記念館(当時)の林昇太郎氏が調査された写真であったため、あらためて北海道博物館に照会したところ、1992年に行われた調査写真の提供を受けることができた。
- (12) 屏風の所在や周辺情報については、松前町教育委員会の佐藤雄生氏、松前城資料館(元松前町教育委員会)の久保泰氏のご助力を得た。久保氏によると、形態は六曲一双の「腰屏風」であり、松前城資料館で展示したこともあるとのことだった。屏風の1面のみではあるが、「熊石町史」(熊石町 1987年)に、松本ヤス氏所蔵として掲載されている。当時は松本家が所蔵していたが、現在の所在は不明であり、原本の確認はできなかった。
- (13) 「屏山の粉本」の存在は、佐々木利和「平沢屏山とアイヌ絵」(「アイヌの四季と生活 十勝アイヌと絵師平沢屏山」財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 1999年)、「アイヌ絵誌の研究」(佐々木利和 草風館 2004年)で触れられている。
- (14) 川崎左右一「絵馬屋・平澤屏山の話」(月刊「北海道倶楽部」第3巻第10号 北海道倶楽部 1936年)
- (15) 本資料については、第57回小樽市博物館特別展図録「描かれた岸辺のアイヌ―旅の絵師がのこしたスケッチ」(小樽市博物館 2005年)、石川直章「アイヌ風俗画画稿の研究―林家旧蔵のアイヌ風俗画画稿の分析―」(「小樽市博物館紀要」第19号 小樽市博物館 2006年)、石川直章「笑顔のアイヌ風俗画―林家旧蔵のアイヌ風俗画画稿―」(「北海道の文化」vol. 78 北海道文化財保護協会 2006年)、長澤政之「小樽市総合博物館蔵「林家旧蔵画稿」の成立についての研究ノート」(「小樽市総合博物館紀要」第27号 2014年)などが詳しい。以下、本文中の記載はこれらの論考によった。
- (16) 波洲は、越崎宗一「アイヌ繪」(中西写真製版印刷所 1945年)では、「鈴木波洲 天保の末年、松前の町奉行たりし鈴木彌一右衛

門で、明断の聞え高く、殊に蝦夷の事情に通曉してみたといふ（北海道倶楽部、第四巻第六號三五頁近松文三郎所説）多分波響に畫を習ひ、波の一字を受けたものであろう、畢竟武士の餘技として、關心をもつてみたアイヌの姿を寫したものである。」されるが、「松前絵師 蠣崎波響伝」（永田富智 1988年）では、鈴木弥一右衛門は「波頂」で、「波洲」については不明とされている。当館は「波洲」銘の作品1点（「蛤の夢に托した箱館の景」800095、軸 1幅）を所蔵しているが、「波洲」の落款、「波洲山人」とある印章ともに、松本家旧蔵資料に付されているものには似ない。「波洲」の画号を持つ絵師が複数いる可能性もある。

- (17) 前出、第57回小樽市博物館特別展図録「描かれた岸辺のアイヌー旅の絵師がのこしたスケッチ」
- (18) 佐藤花菜・濱田淑子『『アイヌ人物六曲一 双屏風』（東北福祉大学コレクション）と関連するアイヌ風俗画』（「東北福祉大学芹沢圭介美術工芸館年報」第6号 2015年）
- (19) 佐々木利和氏は、木村巴江や沢田雪溪が屏山の粉本を利用していた可能性を指摘しているし（前出「アイヌ絵誌の研究」、前出「平沢屏山とアイヌ絵」（「アイヌの四季と生活 十勝アイヌと絵師平沢屏山」））、林昇太郎氏は、「木村巴江は屏山の弟子と伝えられるので当然かもしれないが、同じ時期に函館で活動した竹石・巴江・玉洞・雪溪等が、屏山の作品と同じ図像の作品を残しているということは、屏山を含め、彼らが粉本を提供しあえるような密接な関係にあったとは考えられないだろうか」（「アイヌ絵とその周辺 林昇太郎美術史論集」故林昇太郎氏遺作論集刊行会 2010年）と述べている。
- (20) 五十嵐聡美「アイヌ絵—鎖国下のエキゾティシズム（上）」（「紀要」1996-97 北海道立近代美術館・北海道立旭川美術館・北海道立函館美術館・北海道立帯広美術館・北海道立

三岸好太郎美術館 1997年）、五十嵐聡美「アイヌ絵—鎖国下のエキゾティシズム（下）にかえて アイヌ絵とは何か」（「紀要」2002-04

北海道立近代美術館・北海道立旭川美術館・北海道立函館美術館・北海道立三岸好太郎美術館 2004年）、五十嵐聡美「〈蝦夷国漁場風俗図巻〉について」（「紀要」2009年 北海道立近代美術館・北海道立旭川美術館・北海道立函館美術館・北海道立三岸好太郎美術館 2004年）

- (21) 「アイヌの四季と生活 十勝アイヌと絵師平沢屏山」財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 1999年）
- (22) 「アイヌ風俗画の研究—近世北海道におけるアイヌと美術」（新明英仁 中西出版株式会社 2011年）
- (23) 前出、石川直章「アイヌ風俗画画稿の研究—林家旧蔵のアイヌ風俗画画稿の分析—」（「小樽市博物館紀要」第19号）
- (24) 前出、五十嵐聡美「アイヌ絵—鎖国下のエキゾティシズム（上）」（「紀要」1996-97 北海道立近代美術館ほか）
- (25) アイヌ絵の寄贈者や旧蔵者については、本稿末に付記した所蔵作品一覧（49頁）に記載がある。アイヌ絵以外の有名な資料としては、杉浦嘉七から開拓使へ寄贈された蝦夷錦などがある。
- (26) 「金銀不用」の印は、私札（商人が保証して発行した兌換紙幣）の発行に使われたらしいが、筆者の印に対する理解が浅く詳細は不明である。同種の印が国文学研究資料館「蔵書印データベース」にも蔵書に押されている事例が見られ、ここでは蔵書印として押されているように見える。林家の事例で見ると、「[林家文書]為替手形之事 明治7年」（札幌市中央図書館、デジタルライブラリー）には同じような黒文方印「松前 [ヤマジョウ] 林屋改 金銀通用」の印が押されている。

（市立函館博物館学芸員）

函館地域での公的機関によるアイヌ絵の収集は、開拓使函館仮博物場に始まる。同博物場では北海道で産出する物産をはじめ、国内の天然自然の物産と人工の製造品を収集する中でアイヌの生活用具も収集し、そのなかで「昆布採集図」(800113)と「熊送図」(800114)を収集していた。

その後、アイヌ絵収集に拍車をかけたのは、市立函館図書館長として「郷土資料」の収集に努めた岡田健蔵(1883年～1944年)によるところが大きかった。岡田は1936年(昭和11年)のアイヌ絵画展覧会を契機として資料の収集に努め、現在の函館市中央図書館が所蔵する多数のアイヌ絵を収集した。収集の一方、「蝦夷島奇観」や「蝦夷国風図絵」、「明治初期アイヌ風俗図巻」など、収集した資料についての論考も残している(「岡田健蔵先生論集」岡田健蔵 図書裡会 1969年)。

そして、函館地域でのアイヌ絵集積の、もう1つの一翼を担ったのが、市立函館博物館だった。1948年(昭和23年)、市立函館博物館条例が制定され、それ以前は市立函館図書館の管理下にあった博物館が独立した。その後、五稜郭分館(1955年)の設置を経て、現在の本館が開館したのが、1966年(昭和44年)のことである。

博物館の整備に呼応するように、博物館におけるアイヌ絵の収集件数は、1948年～1950年代は「アイヌ風俗 12ヶ月屏風(7月～12月)」(800112)「アイヌ絵巻」(800051)「アイヌ絵の粉本」(800262～800291)などを含む76件、本館開館の前後となる1960年代は「落下コロボックル図」(800040)「狩猟図」(800106)「熊狩図」(800111)などを含む13件を数え、この時代に積極的な収集を行っていた様子が伺える。

1990年代にも一次的ではあるが購入による収集が続いたが、集積のうえで大きかったのは、1998年(平成10年)と2018年(平成30年)、2019年(平成31年)の「蝦夷絵」(K-H13-0446)「挨拶図」(H10-0051-45-034)などの優れた作品を含む「見玉コレクション」(アイヌ絵は51件)の寄贈であった。

結果、2020年(令和2年)現在、「市立函館博物館所蔵アイヌ絵一覧」(次頁以降)のとおり、「郷土資料の宝庫」と称される函館市中央図書館にも劣らないアイヌ絵を収蔵するに至っている。

港まつりアイヌ絵画展覧会ポスター (館蔵)
市立函館図書館 辻印刷所 1936年

このポスターは、アイヌ絵画展覧会にあわせて作成されたもので、岡田健蔵が、蠣崎波響「夷酋列像(イコトイ)」(現在は函館市中央図書館蔵)を図書館員大垣友雄に模写させたものである。アイヌ絵収集の現状を憂い、その宣伝のため、紙質を吟味した「豪華版」として制作された。





港まつりアイヌ絵画展覧会ポスター 館蔵



蝦夷漁艇 800006



昆布干図屏風 800025



鹿狩図 800028



熊送狩猟図屏風 800031



蕨下コロボックル図 800040



狩猟図 800046



蝦夷風俗図 800052



鹿狩図襖 800058



狩猟図 800106



アイヌ風俗図 800107



マレク漁図 800108



漁猟図(氷割漁図) 800109



熊狩図 800111



アイヌ風俗十二月月屏風(7月~12月) 800112



昆布採集図 800113



熊送図 800114



狩猟図 800120



熊狩図 800121



熊送図屏風 800124(1)



熊送図屏風 800124(2)



アイヌ風俗十二月月屏風(1月~6月) 800129



熊送図 800135



介抱図 800138



家族図 800154



男女出獵図 粉本 800262



男女出獵図 粉本 800263



蝦夷島奇観 女夷の礼(喫煙図) 粉本 800264



【蝦夷島奇観】 飲酒図 粉本 800265



【蝦夷島奇観】 踏舞図 粉本 左 800266・右 H13-450-01-03



狩獵図 粉本 800267



犬と母子図 粉本 800268



機織図 粉本 800269



糸撚図 粉本 800270



水辺糸巻図 粉本 800271



網運搬図 粉本 800272



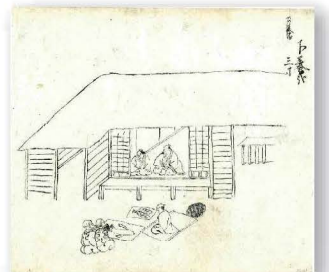
イノウ作図 粉本 800273



炉辺喫煙図 粉本 800274



蝦夷島奇観 ニヨエン図 粉本 800275



蝦夷島奇観 とり獲て会所に出す図 粉本 800276



蝦夷島奇観 近蝦夷地居家図 粉本 800277



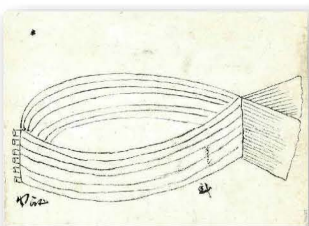
蝦夷島奇観 イナフ図・ラツコ図 粉本 800278



蝦夷島奇観 オンカミ図 粉本 800279



蝦夷島奇観 とり獲て家に帰る図 粉本 800280



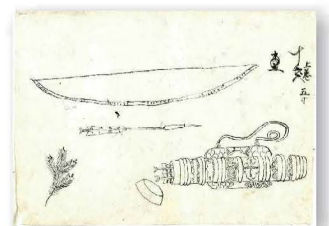
蝦夷島奇観 シャバウベ図 粉本 800281



蝦夷島奇観 ウカリ稽古図 粉本 800282

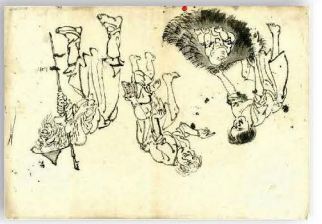


蝦夷島奇観 方演奏図、モセキナ写生図 粉本 800283

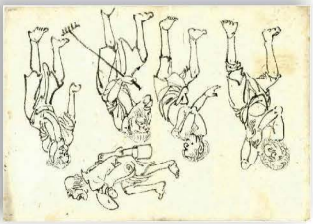


蝦夷島奇観 弓矢韌図 粉本 800284

老人・親子人物図 800291-015



漁場作業・日常動作図 800291-016



漁場作業(諸動作)図 800291-017



山越(渡川)図 800291-018



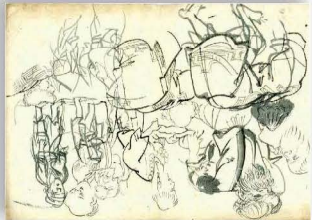
漁場作業(移動)図 800291-011



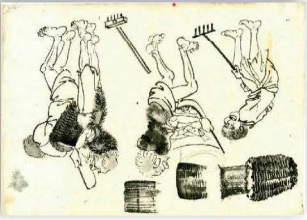
音(ケリ)図 800291-012



オツカミ図 800291-013



漁場作業(運搬動作)図 800291-014



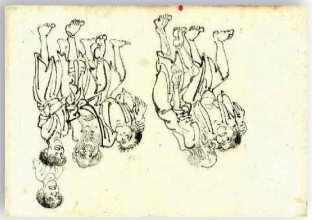
酒宴図 800291-007



漁場日常図 800291-008



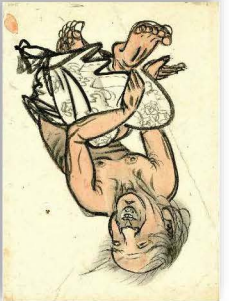
群婦図 800291-009



動物動作図 800291-010



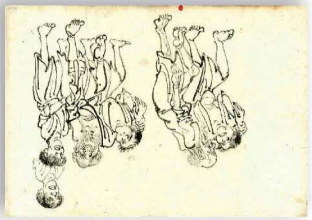
諸肌女性図 800291-003



老男性図 800291-004



弓射動作図 800291-005



表情図 800291-006



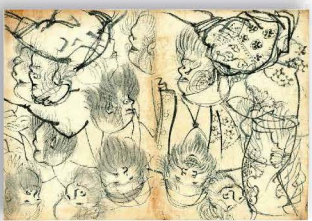
蝦夷島奇観 女夷文手図 粉本 800289



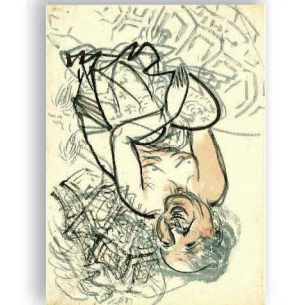
蝦夷島奇観 サイモン図 粉本 800290



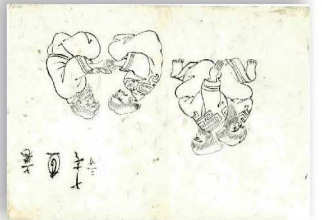
微笑図 800291-001



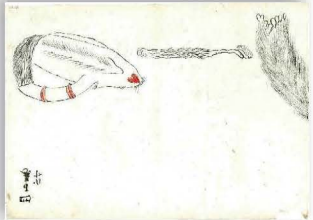
諸肌女性図 800291-002



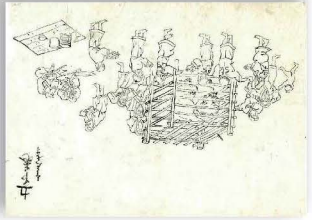
蝦夷島奇観 ウリリ 粉本 800285



蝦夷島奇観 塩敷になしたる図・海狗腎 粉本 800286



蝦夷島奇観 イナウ削り、熊鷹の周りのリムセ 粉本 800287

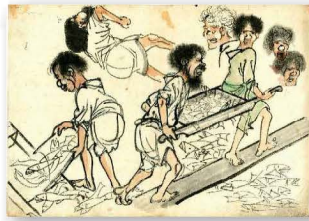


蝦夷島奇観 おとせい浮眠の図 粉本 800288





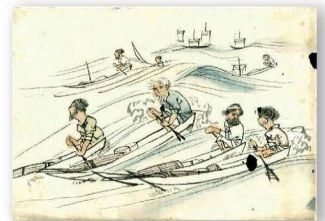
食事・物運図 800291-019



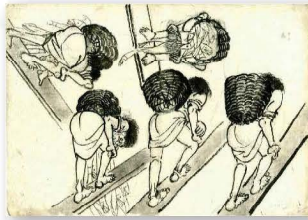
漁場作業(運搬)図 800291-020



漁場諸動作・顔図 800291-021



海上船漕図 800291-022



漁場作業(運搬動作)図 800291-023



喫煙・食事動作図 800291-024



転倒を笑う図 800291-025(表)



転倒を笑う図 800291-025(裏)



諸肌女性図 800291-026(表)



諸肌女性図 800291-026(裏)



表情図 800291-027(表)



表情図 800291-027(裏)



輪舞(リムセ)図 800291-028(右)・029(左)



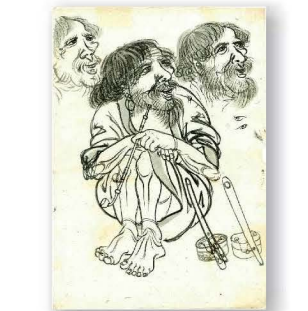
山越(渡川)図 800291-030



男女図 800291-031



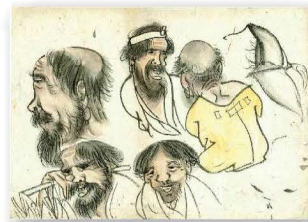
漁場作業(運搬)・表情図 800291-032



喫煙図 800291-033



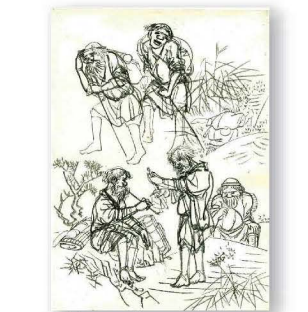
男女図 800291-034



顔図 800291-035



喫煙動作図 800291-036



山越人物動作図 800291-037



山越人物動作図 800291-038



蝦夷人帰途図 H02-0360



男夷図[イコリカベニ肖像] H06-0118



アイヌ風俗絵馬 H08-0022



母子図扇面 H09-0007



蝦夷人唐子文様碗 H09-0080



男女魚漁図 H10-0051-45-029



介抱図 H10-0051-45-030



熊送図屏風 H10-0051-14



山越図 H10-0051-45-031



男女狩獵図 H10-0051-45-032



神祈図 H10-0051-45-033



挨拶図 H10-0051-45-034



母子図 H10-0051-45-035



男性図 H10-0051-45-036



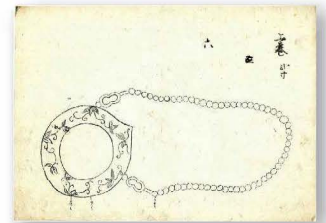
男女狩獵図 H10-0051-45-037



熊飼養図 H10-0051-45-038



家族図 H10-0051-45-042



蝦夷島奇観 シトキ図 粉本
K-H13-0450-01-01



蝦夷島奇観 列坐 粉本
K-H13-0450-01-02



蝦夷島奇観 花矢を射る図 粉本
K-H13-0450-01-04



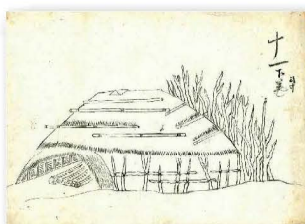
蝦夷島奇観 挨拶の図 粉本
K-H13-0450-01-05



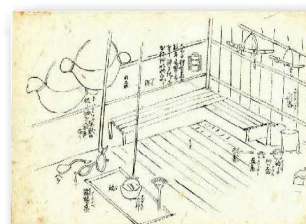
蝦夷島奇観 カムイノミ図 粉本
K-H13-0450-01-06



蝦夷島奇観 酒宴図 粉本
K-H13-0450-01-07



蝦夷島奇観 西夷地居家図 粉本
K-H13-0450-01-08



蝦夷島奇観 家居宝城図(家屋内部) 粉本
K-H13-0450-01-09



蝦夷島奇観 マチコル図 粉本
K-H13-0450-01-10



蝦夷島奇観 おっとせいに船を打ち込む図
粉本 K-H13-0450-01-11



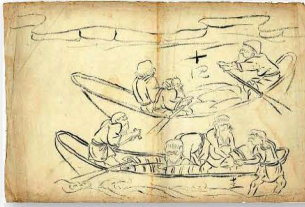
蝦夷国漁場風俗図巻(オムシャ図) 粉本
K-H13-0450-01-12



蝦夷国風図絵(熊狩図) 粉本
K-H13-0450-02-01



蝦夷国漁場風俗図巻(地曳き網図) 粉本
K-H13-0450-02-02



蝦夷国漁場風俗図巻(荷渡図) 粉本
K-H13-0450-03



操船図 粉本 K-H13-0450-04



地曳き網図 粉本 K-H13-0450-05



宝物検分図 粉本 K-H13-0450-06



男女出猟図 粉本 K-H13-0450-07



荷造図 粉本 K-H13-0450-08



荷造図 粉本 K-H13-0450-09



狩猟帰路図 H16-0029



ウイマム図絵馬 H29-0029



魚猟図屏風 H29-0031



遊撃隊起終録并南蝦夷戦争記 附録
戦地写生図(部分) S57-0079



戦友姿絵(部分) S63-0020



おひょう漁図 粉本 R01-0003-001



毛人三傑之図 R01-0003-003



家族図 R01-0003-004



蝦夷島奇観(上) 800002



蝦夷島奇観(中) 800002



蝦夷島奇観(下) 800002



アイヌ絵巻 800051



蝦夷国図画 800134



アイヌ絵巻 H10-0051-45-039



蝦夷国図絵(前半) H10-0051-45-040



蝦夷国図絵(後半) H10-0051-45-040



熊送図 H10-0051-45-041



蝦夷人物巻物 H10-0051-45-043



蝦夷島奇観 H10-0051-45-044



蝦夷島奇観(前半) H10-0051-45-045



蝦夷島奇観(後半) H10-0051-45-046



蝦夷島奇観 H10-0051-45-046



蝦夷島奇観 K-H13-0442



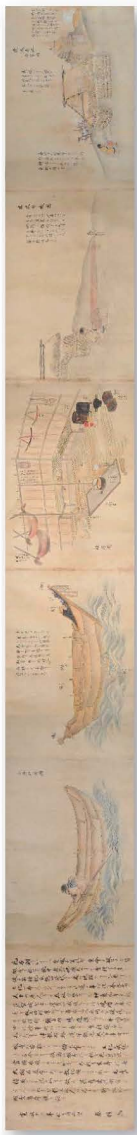
蝦夷島奇観(文政本)(前半) K-H13-0443-1



蝦夷島奇観(文政本)(後半) K-H13-0443-4



蝦夷島奇観(寛政年間幕府蝦夷風俗取調記)(前半) K-H13-0443-3



蝦夷島奇観(寛政年間幕府蝦夷風俗取調記)(後半) K-H13-0443-2



蝦夷島奇観(前半) K-H13-0444



蝦夷島奇観(後半) K-H13-0444



蝦夷風俗図(前半) K-H13-0445



蝦夷風俗図(後半) K-H13-0445



蝦夷絵(前半) K-H13-0446



蝦夷絵(後半) K-H13-0446

資料番号	資料名	資料詳細(サイズは縦×横cm)
800002	蝦夷島奇観	卷子本 紙本着色 写本 原本:1800年(寛政12年)上・中・下3巻 木箱入「蝦夷島奇観」(村上島之丞)の写 花光コレクション 上:26.5×504.0 中:26.5×499.0 下:26.5×502.0
800006	蝦夷漁艇	横山華山 軸装 紙本着色 1幅 木箱入 113.0×51.5
800025	昆布干図屏風	平福徳庵 屏風 紙本着色 1883年(明治16年)頃 2曲1隻 函館図書館主催のアイヌ絵画展覧会出品時は、函館の商人国領平七蔵(「アイヌ絵」越崎宗一 1945年) 133.5×135.0
800028	鹿狩図	平福徳庵 額装 紙本着色 1面 款記・印章等はなく、作者は「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」(市立函館博物館 1981)による 25.0×72.5
800031	熊送狩猟図屏風	上田雪溪(沢田雪溪) 屏風 紙本着色 2曲1隻 各面:138.0×51.5
800040	露下コロボックル図	松浦武四郎 軸装 紙本着色 1幅 木箱入 款記:「北海道人絵」・白文方印「弘印」 函館市指定有形文化財 花光コレクション 23.0×31.0
800046	狩猟図	村上貞助 軸装 絹本着色 1幅 紙・木箱入「為 許乙兄之需写 吉備 緯章」印章:ロシア語のキリル文字で朱文円印「мураками」(murakami=むらかみ) 男性が弓を構える構図は雪遊作品(H10-0051-45-032)と同じ 93.5×38.0
800051	アイヌ絵巻	富岡鉄斎 卷子本 絹本着色 1巻 木箱入 函館市指定有形文化財 巻松に鱸松塘(1824年～1898年、漢詩人)による跋文がある 25.5×231.0
800052	蝦夷風俗図	富岡鉄斎 軸装 紙本着色 1幅 木箱入 132.0×33.5
800058	鹿狩図襖	南海 襖 紙本着色 4面 朱文方印「福徳壽海」 白文方印「南海漁父」 各面:170.0×84.0
800106	狩猟図	早坂文領 軸装 紙本着色 木箱入 1幅 97.0×46.5
800107	アイヌ風俗図	平沢屏山 軸装 絹本着色 1幅 木箱入 能登川コレクション 109.0×41.5
800108	マレク漁図	平沢屏山 額装 紙本着色 1面 60.5×29.0
800109	漁猟図(氷割漁図)	平沢屏山 額装 紙本着色 1面 62.0×98.0
800111	熊狩図	平沢屏山 額装 紙本着色 1871年(明治4年)頃 1面 制作年代は大英博物館の下絵とみられる資料に記された「未」の年記による 62.0×97.0
800112	アイヌ風俗十二ヶ月屏風(7月～12月)	平沢屏山 屏風 紙本着色 6曲半双(半双別登録) 函館市指定有形文化財 2面:129.0×51.0 4面:129.0×54.0
800113	昆布採集図	平沢屏山 額装 紙本着色 1面 開拓使収集資料「開拓使事業報告書 乾 函館支庁」北海道立文書館(簿書/7189)に「土人昆布取ノ図」として記録される。「明治二十五年四月 素博物場陳列物品商業学校江引継物品及其外物品書類」(函館市中央図書館)の「函館博物場列品目録 歴史之部」に、「第三百十二号 土人昆布採取ノ図額 一面 日高国三石 明治十二年六月」とある通り、1879年(明治12年)6月に日高の三石で開拓使が収集したものである。作者を示す落款・印章等はないが、「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」(市立函館博物館 1981)では伝平沢屏山とされる。これを裏付けるように、明治17年10月22日付「函館新聞」には「絵馬屋某」の「旧蝦夷土人図」(図柄等への言及はない)が展示されていたことが報道されている 63.0×73.0
800114	熊送図	平沢屏山 額装 紙本着色 1面 開拓使収集資料「開拓使事業報告書 乾 函館支庁」北海道立文書館蔵(簿書/7189)に「土人熊祭の額面」として記録される。「明治二十五年四月 素博物場陳列物品商業学校江引継物品及其外物品書類」(函館市中央図書館)の「函館博物場列品目録 歴史之部」に、「第三百十一号 土人熊祭ノ図額 一面 同[日高国 三石] 明治十二年六月」とある通り、1879年(明治12年)6月に日高の三石で開拓使が収集したものである。作者を示す落款・印章等はないが、「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」(市立函館博物館 1981)では伝平沢屏山とされる。これを裏付けるように、明治17年10月22日付「函館新聞」には「絵馬屋某」の「旧蝦夷土人図」(図柄等への言及はない)が展示されていたことが報道されている 63.5×72.5
800120	狩猟図	千島春里 軸装 絹本着色 1幅 木箱入 熊狩図(800121)と同じ箱入り 120.0×48.0
800121	熊狩図	千島春里 軸装 絹本着色 1幅 木箱入 狩猟図(800120)と同じ箱入り 113.0×49.0
800124	熊送図屏風	村瀬義徳 屏風 絹本着色 1922年(大正11年) 款記:「戊午之秋 義徳」 6曲1双 各:171.0×372.0
800129	アイヌ風俗十二ヶ月屏風(1月～6月)	模写:宮原柳僊 原画:平沢屏山 屏風 紙本着色 6曲半双(半双は別登録) 模写 1957年(昭和32年) 函館市指定有形文化財 模写作成当時、3月・4月の原本(現花巻市)の所在が明かできなかったため、当時は越崎宗一が所蔵していた1月・2月・5月・6月と藪斎桃湖による模写(ともに現、天理大学附属天理図書館)から、平塚常次郎が作らせたもの。原本は元々屏風で、函館の商家平塚家旧蔵 2面:139.0×51.5 4面:139.0×52.5
800134	蝦夷国風図画	卷子本 紙本着色 1巻 木箱入 資料名は軸外題による 内容は蝦夷国風図絵と同じ 29.5×649.5
800135	熊送図	軸装 紙本着色 1幅 木箱入 花光コレクション 63.0×30.0
800138	介抱図(酔帰図)	軸装 絹本着色 1幅 木箱入 千島春里(天理大学附属図書館所蔵)に類似図がある 75.5×28.5
800154	家族図	軸装 紙本着色 1幅 木箱入 平福徳庵「北海道土人之図」(「平福徳庵画集」大日本絵画 1983 掲載資料)に類似。「松前アイヌ帰漁図」(仙北市立角館町平福記念美術館)「アイヌ捕漁図」(秋田県立近代美術館)(資料名は「没後一三〇年 平福徳庵展 図録」秋田県立近代美術館 2019年による)の反転図にも類似 能登川コレクション 125.0×52.5
800262	男女出猟図 粉本	一枚物(3枚継) 紙本墨書 1枚 絵の発注者とも見られる「子モロ請負人 藤野喜兵衛」「ソウヤ請負人 藤野喜兵衛」「イシカリ請負人 阿部屋 伝次郎」、天地を示す「上」「下」の記載がある。同様の記載は「荷造図 粉本」(K-H13-0450-09 児玉コレクション)にも見られ、本資料を含む資料群(800262～800290)と児玉コレクションの粉本類(K-H13-0450-01～09)は元々1つの資料群であったとみられる。本図を含む一群は、平沢屏山のものとして伝えられ、同一寄贈者からの粉本であることを考えると、「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」(市立函館博物館 1981)で作者は雪好とされ、雪好に類似した作品(「アイヌ人物図」個人蔵)があることから作者は雪好とされてきたが、屏山による雪好模本である可能性もある。「男女出猟図 粉本」(800263)、男女出猟図 粉本」(K-H13-0450-07、児玉コレクション)と同系統の図 83.0×45.0

資料番号	資料名	資料詳細(サイズは縦×横cm)
800263	男女出獵図 粉本	一枚物(3枚継) 紙本墨書 1枚「男女出獵図 粉本」(K-H13-0450-07、児玉コレクション)、妻沼コレクション(北海道博物館 収蔵番号126271)は、ほぼ同じ構図である。本図を含む一群は、平沢屏山のものと伝えられ、同一寄贈者からの粉本であることを考えると、「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」(市立函館博物館 1981)で作者は雪好とされ、雪好に類似した作品(「アイヌ人物図」個人蔵)があることから作者は雪好とされてきたが、屏山による雪好模本である可能性もある。「男女出獵図 粉本」(800262)とも同系統の図 83.0×40.5
800264	蝦夷島奇観 女夷の礼(・喫煙図) 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「十五 上巻 六寸」の記載あり。右端は「蝦夷島奇観 其四(女夷の礼)」、中央は蝦夷紀行「蝦夷人乙名之図」に似る。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)には喫煙図部分がないが、構想段階の下絵か。「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」(市立函館博物館 1981)では作者が雪好とされるが、根拠は不明であり、描写は雪好には似ない 31.4×42.5
800265	[蝦夷島奇観] 飲酒図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「上巻 九寸 十式」の記載があり。「蝦夷島奇観」の一部か。右端は「蝦夷島奇観 サイモン図」に描かれた女性の左右反転図、中央の男性2人は「蝦夷島奇観 飲酒図」の一部の左右反転図に似る。「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」(市立函館博物館 1981)では作者が雪好とされるが、根拠は不明であり、描写は雪好には似ない 31.4×42.5
800266	[蝦夷島奇観] 踏舞図 粉本の一部	一枚物 紙本墨書 1枚「蝦夷島奇観」の一部か。K-H13-0450-01-03に連続する図。この結果から本資料を含む資料群と児玉コレクションの粉本類はもともと1つであったことがわかる。「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」(市立函館博物館 1981)では作者が雪好とされるが、根拠は不明であり、描写は雪好には似ない 31.5×23.5
800267	狩獵図 粉本	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」(市立函館博物館 1981)では作者が雪好とされるが、むしろ当館所蔵の千島春里「狩獵図」(800120)、「蝦夷風俗屏風」(天理大学附属天理図書館)などに近い 48.0×60.0
800268	犬と母子図 粉本	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚「市立函館博物館蔵品目録2 美術工芸資料篇」(市立函館博物館 1981)では作者が雪好とされるが、左端の子供は「狩獵図 粉本」(800267)と同じ姿であり、中央の女性と犬の描き方・構図は千島春里の図に似る 28.0×46.0
800269	機織図 粉本	平沢屏山 一枚物(3枚継) 紙本墨書 1枚 松前町松本家旧蔵屏風の粉本 45.0×50.0
800270	糸撚図 粉本	平沢屏山 一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 松前町松本家旧蔵屏風の粉本。千島春里「アイヌ人物図」(公益財団法人アイヌ民族文化財団)の一部、早坂文嶺「糸より図」(妻沼コレクション 北海道博物館 収蔵番号126250)の左右反転図にも似る 45.0×50.0
800271	水辺糸巻図 粉本	平沢屏山 一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 松前町松本家旧蔵屏風の粉本 45.0×50.0
800272	網運搬図 粉本	平沢屏山 一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 松前町松本家旧蔵屏風の粉本。千島春里「アイヌ人物図」(公益財団法人アイヌ民族文化財団)に似た構図がある 45.0×50.0
800273	イノウ作図 粉本	平沢屏山 一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 松前町松本家旧蔵屏風の粉本 45.0×50.0
800274	炉辺喫煙図 粉本	平沢屏山 一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 松前町松本家旧蔵屏風の粉本。「アイヌ風俗十二月屏風」14月家族らん図にも似る 45.0×50.0
800275	蝦夷島奇観 ニヨエン図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「下巻 十五 五寸」の記載あり 31.4×42.5
800276	蝦夷島奇観 とり獲て会所に出す図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「下巻 式 三寸」の記載あり。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 31.4×42.5
800277	蝦夷島奇観 近蝦夷地居家図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「下巻 十 四寸」の記載あり。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か。右に樹木が描かれていない点を除くと類似 31.4×42.5
800278	蝦夷島奇観 イナヲ図・ラツコ図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「上巻 七 五寸」「イナヲ」「八」の記載、「うす墨」の指定あり。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 31.4×42.5
800279	蝦夷島奇観 オンカミ図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か。先頭を歩く人物の顔の向きや細部が異なる以外は一致。「アイヌ絵下絵 オンカミ図」(800291-013)にも似る。波嶋「アイヌ人物六曲一双屏風」(東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館)や大塚和義所蔵図にも類似の図がある 31.4×42.5
800280	蝦夷島奇観 とり獲て家に帰る図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「下巻 壹 初 壹尺一寸」の記載あり。右下イノウ作りをする人物が1人欠けるが、「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 31.4×42.5
800281	蝦夷島奇観 シヤバウベ図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「式」、裏面に「五 四寸」「タイシ」の記載あり。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 23.5×31.4
800282	蝦夷島奇観 ウカリ稽古図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 人物の数が違う点など細部は異なるが、「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 31.4×42.5
800283	蝦夷島奇観 カ演奏図、モセキナ写生図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「上巻 十三 四寸」の記載あり。器物に「うす墨」「赤」「アイ」「タイシヤ(代緒)」の色指定、カー(トンコリ)に「五本」の弦を示す注記がある。「ランヌマ写生」が欠け(同図は「蝦夷島奇観 弓矢鞆図」(800284)に描かれる)、行器(シントコ)が描かれている点異なるが、「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 31.4×42.5
800284	蝦夷島奇観 弓矢鞆図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「上巻 十口[三?] 五寸」の記載あり。「ランヌマ写生」が描かれている点異なるが、「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 31.4×42.5
800285	蝦夷島奇観 ウリリ 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「上巻 十壹 三寸」の記載あり。「蝦夷島奇観 其三(ウリリ)」の粉本。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 31.4×42.5
800286	蝦夷島奇観 塩製になしたる図・海狗腎 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「下巻 四 式寸」の記載、一部朱塗り。左端に「ヲ、子ツブ図」の一部あり。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 31.4×42.5
800287	蝦夷島奇観 イノウ削り、熊檻の周りでのリムセ 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「下巻 五 壹尺七寸」の記載あり。人物の数が異なるが、「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 31.4×42.5
800288	蝦夷島奇観 おっとせい浮眠の図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚「下巻 三 式寸」の記載、一部朱塗り。水鳥の位置が異なるが、「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 31.4×42.5
800289	蝦夷島奇観 女夷文手図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 刺青に「アイ」の色指定、裏面「四 上巻 五寸」の記載あり。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 27.9×19.0

資料番号	資料名	資料詳細(サイズは縦×横cm)
800290	蝦夷島奇観 サイモン図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 「十六 下巻ヲハリ 四寸」の記載あり。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 27.9×19.0
(800291総括)	アイヌ絵下絵	一枚物 紙本墨書・一部着色 38枚1組 用紙端の同一箇所には綴り穴跡があり、綴であったことが分かる。書込は異なる筆跡で描かれているものがある。小樽市総合博物館に同じ作者のものと思われる図がある。個別図は下記の通り
800291-001	微笑図	一枚物 紙本墨書 1枚 笑う男性の群衆図。輪郭線など、胡粉を塗り修正した跡がある 27.9×40.2
800291-002	諸肌女性図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 坐る女性図。右側に男性の顔も見える。800291-003・026と同じ構図、肌のみ着色。胡粉を塗り修正した跡がある 27.5×19.8
800291-003	諸肌女性図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 坐る女性図。800291-002・026と同じ構図。肌のみ着色 27.6×19.7
800291-004	老男性図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 老人の顔・頭部を描いた図。頭巾を被った人物と正面を向く人物は800291-021にも見える。肌・着衣の一部、頭巾の様子が着色される 38.9×27.5
800291-005	弓射動作図	一枚物 紙本墨書 1枚 弓矢を射る男性を様々な角度から描いた図。煙草を吸う姿も交じる 28.0×39.0
800291-006	表情図	一枚物 紙本墨書 1枚 男性の顔を繰り返し描き、女性も交じる。「幣奉る所をいふ」の書込がある 27.9×40.3
800291-007	酒宴図	一枚物 紙本墨書 1枚 酒宴の一場面か。熊皮を敷く人物、杖をつく老齢男性と器を掲げる人物の図 27.9×39.9
800291-008	漁場日常図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 魚を手に持ちカゴに腰掛ける男性、立ち姿、坐った姿などが描かれる。着衣の一部着色 28.2×40.0
800291-009	酔帰図	一枚物 紙本墨書 1枚 酩酊して肩を組んで歩く図 28.0×40.0
800291-010	敷物動作図	一枚物 紙本墨書 1枚 敷物を巻く、敷く、運ぶ一連の動作を描く 28.0×40.0
800291-011	漁場作業(移動)図	一枚物 紙本墨書 1枚 魚を運ぶ男性たち。左端の人物は杖をつき帽子を被る 28.0×40.0
800291-012	杓(ケリ)図	一枚物 紙本墨書・着色 1枚 杓のみを描く 28.0×40.1
800291-013	オンカミ図	一枚物 紙本墨書 1枚 オンカミ図、子熊を抱く子供など描かれる。胡粉を塗り、修正した跡がある。オンカミ図は「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)やその下絵とみられる「蝦夷島奇観 オンカミ図 粉本」(800279)にも似る。波嶋「アイヌ人物六曲一雙屏風」(東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館)や大塚和義所蔵図にも類似の図がある 28.4×38.9
800291-014	漁場作業(運搬動作)図	一枚物 紙本墨書 1枚 魚を集め、運び、背負い籠に入れる一連の動作が、上部には背負い籠のみが描かれる 28.1×40.1
800291-015	老人・親子人物図	一枚物 紙本墨書 1枚 帽子を被り杖をつく老人、物を運ぶ男児と老婆、毛皮を敷く女性と幼児が描かれる 28.0×40.1
800291-016	漁場作業図・日常動作図	一枚物 紙本墨書 1枚 身体を掻く男性などが描かれる 28.0×40.0
800291-017	漁場作業(諸動作)図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 船漕ぎや船上での昆布採り、魚を運ぶ姿などが描かれる。脚や上半身のみ描かれた部分もある。肌の一部のみ着色 27.9×38.7
800291-018	山越(渡川)図	一枚物 紙本墨書 1枚 背景まで描かれおり、他の絵よりも下絵的である。左から「秋山鹿ヲ遠キ坡ニ置 高遠ノ景 よしノ三人尋ゆく 三人口口の地ノ柳樹あるべし」の詞書がある 28.0×38.5
800291-019	食事・物運図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 食事や物を運ぶ男性図。肌の一部のみ着色。000291-024に同じ人物が見える 28.0×40.0
800291-020	漁場作業(運搬)図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 魚を運搬する図など。余白には顔のみを描いた部分もある。肌および着衣の一部着色。胡粉を塗り修正した跡もある 28.0×40.0
800291-021	漁場諸動作・顔図	一枚物 紙本墨書 1枚 人物の動作や顔が繰り返し描かれる。人物の顔には800291-004に描かれた人物と同じ人物が見られる 27.7×38.5
800291-022	海上船漕図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 船を漕ぐ姿、遠方には和船も見え、他の絵よりも下絵的である。肌および着衣、背景の一部が着色される 27.8×39.5
800291-023	漁場作業(運搬動作)図	一枚物 紙本墨書 1枚 歩み板の上で背負い籠に魚を入れて運ぶ男性の動作を描く 28.0×40.1
800291-024	喫煙・食事動作図	一枚物 紙本墨書 1枚 喫煙や食事する男性の動作を描く。000291-019に同じ人物が見える 27.9×39.9
800291-025	転倒を笑う図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 表裏とも図が描かれる。歩み板を踏み外し魚の貯蔵場所に落ちる男性とそれを笑う男性。800291-032に類似した人物がみられる。「上に居て落たるを笑ふ声」「納保よりすへり落勢」「あゆみ板より落たる所也」「落たる所」の詞書がある 28.1×40.0
800291-026	諸肌女性図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 表裏とも絵があり、座る女性が描かれる。000291-002・003に同じ構図。片面の女性の肌・唇のみ着色される。左から「ぬいなしも綿のことゆふのミ也 女夷の下衣の類也此上ニ厚子ヲきるノ二十斗明るもあり或ハあけきるもあり 前ニ巾後ニ巾也 着用するニすそよしかふりてくるもの也ノも綿ひとへ也 ○夏ハ一枚きるもありノ○是ニしかの皮のみみか後ニしたるを 上りすそ皮てぬい付るありノ夏衣ノ下着也 冬ニキズノ[図説明]袖 袖 一巾已上 一巾已上」の説明書がある 27.5×39.6
800291-027	表情図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 表裏とも図が描かれる。男性の全体像に加え、笑う顔のみが繰り返し描かれる。肌や唇の一部は着色される。右上から「歩行板より落つたるをわろふノ[右下]わろふ顔ノ[中央下]此女夷前曲図所為の行ひより見合も□□ 女ニみみかねあるもなきも とりどりしたるケよし また連々舞りけたるも 同しおちたき□□のものか頭巾なども落すへし 歩行板よりおちたるを笑ふ勢、尤行画のことし」との書込がある 28.0×39.8
800291-028	輪舞(リムセ)図	一枚物 紙本墨書 1枚 リムセ図、800291-029につながる。胡粉を塗り輪郭を修正した跡。下部にも顔や脚のみが描かれる 27.9×21.4

資料番号	資料名	資料詳細(サイズは縦×横cm)
800291-029	輪舞(リムセ)図	一枚物 紙本着色 1枚 リムセ図、800291-028につながる。胡粉を塗り輪郭を修正した跡。肌の一部のみ着色 27.9×18.9 28.5×40.1
800291-030	山越(渡川)図	一枚物 紙本墨書 1枚 川を渡る男性たちの図。背景まで描かれており下絵的である。胡粉を塗り修正跡がある。3人の男性のうち2人は、800291-038に同じ人物が見える 28.5×40.1
800291-031	男女図	一枚物 紙本墨書 1枚 杖をついて薪を運ぶ老男性と側らを歩く老婆の図。「老婆長曾より八分斗もひくさまよし 男夷の左りの足揃ふ也 尚斗長くすべし」の書込がある 40.2×28.0
800291-032	漁場作業(運搬)・表情図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 歩み板を踏み外し魚の貯蔵場所に落ちる男性、魚を運ぶ女性、繰り返す老婆の顔が描かれる。肌や唇、魚など一部が着色される。左から「此姿ヲ画方宜ノ髪多ク画コト悪シ賤ゲナルナリ雅ナルヲ好ムヘシノヲタフクノ面ニスヘシ中人画ヘカラズアルハアシ也ノロノ入墨ナキモヨシ又アルモ宜 点シガタキモノナリ口ニテ洒落ニ一点アルカノ口ニ少シ青ヲカケル軽く画くヘシノ下左より女夷カタヲノカセテ両袖ヲ前ノ服ノ處ヘカキミテツボウノ下衣ヲアラハシタルカヨシ〇シリハ大キク画 老女ハ格別ナリ〇口ハフチニ入墨ヲスル故格好ヨリ小ニ画方ヨシ〇ヲヤキ中ニハレクテムヲカケタルモアルベシ耳金モアルモアリナキモアルカ宜シ男女トモニ〇男夷ニ魚ヲナゲツケル写意ナリ」の書込がある 40.0×28.1
800291-033	喫煙図	一枚物 紙本墨書 1枚 煙草を吸う男性図。顔や目などが余白に書かれる。煙草入れは胡粉を塗り書き直される 39.2×27.5
800291-034	男女図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 杖をついて歩く男性と女性図。肌の一部が着色され、朱線による輪郭の訂正がある。「〇此頭巾の上へ紐をはられたるハあしく頭巾の顔には隠れたるがよろし 〇頭巾なきとても半口ならよし両方ともニ隠れたるハ悪し」の書込がある 40.3×28.2
800291-035	顔図	一枚物 紙本墨書・一部着色 1枚 男性の顔や頭部、頭巾などが描かれ、肌・衣服の一部が着色される 27.4×39.0
800291-036	喫煙動作図	一枚物 紙本墨書 1枚 煙草を吸う男性と頭巾を被った老男性の図。胡粉を塗り輪郭を修正した跡がある。中央の男性図は別紙貼付のうえ描かれている 28.3×40.0
800291-037	山越人物動作図	一枚物 紙本墨書 1枚 杖をついて歩く男女、煙草を吸い休憩をとる男性など、山越えの様々な場面が描かれる。800291-030の人物に構図は異なるが、同じ顔の人物が見られる 38.8×27.8
800291-038	山越人物動作図	一枚物 紙本墨書 1枚 杖をついて歩く男性の様々な図案と煙草を吸う頭巾の男性が描かれる。胡粉を塗り輪郭を修正した跡がある。800291-030に同じ人物が見える 28.5×40.3
H02-0360	蝦夷人帰途図	平野五岳 軸装 紙本着色 1幅 65.2×30.7
H06-0118	男夷図[イコリカベニ肖像]	軸装 紙本着色 1幅 蝦夷島奇観に「男夷図」の写だが、描き方はかなり異なる。詞書は同「男夷図」と「女夷図」の身体の各名称で、蝦夷島奇観では脇にアイヌ語の読みが付されるが本図にはない 53.3×32.3
H08-0022	アイヌ風俗絵馬	額装 紙本着色 板張 1775年(安永4年) 1面「奉獻 安永四己未年正月吉日 藤原政展」奉納先は不明だが、道南の神社が所蔵していたという 80.0×127.0
H09-0007	母子図扇面	平福徳庵 額装 扇面 紙本着色 1面 19.0×42.0
H09-0080	蝦夷人唐子文様碗	陶器 箱館焼 染付 1859年(安政6年) 1客 底面「安政六巳未六月蝦夷地函館谷地頭ニテ製之 一精用口(印)」下段に唐子、上段にアイヌの人々を描き、口縁部内側にはエトロフ会所が描かれる。「蝦夷人アイノイフウ(異風)イタシイルトコロ」の文字入り 口径9.8×底径6.3×高9.0
H10-0051-14	熊送図屏風	屏風 紙本着色 8曲1隻 絵の特徴から雪好系の作者か 児玉コレクション 117.0×440.0
H10-0051-45-029	男女魚漁図	雪好 軸装 絹本着色 1幅 木箱入 児玉コレクション 102.7×30.5
H10-0051-45-030	介抱図(酔帰図)	軸装 紙本着色 1幅 千島春里(天理大学附属図書館所蔵)に類似図がある 児玉コレクション 51.0×30.1
H10-0051-45-031	山越図	千島春里 軸装 絹本着色 1幅 左の男性は「家族図」(H10-0051-45-042)に似る 児玉コレクション 84.0×30.2
H10-0051-45-032	男女狩猟図	雪遊 軸装 紙本着色 1幅 雪遊は雪好と同じような構図の絵を残し、雪好と同じ「一日口渚」の印章を用いていることから、雪好の弟子と考えられる。作品は雪好には劣る。本図は、越崎宗一「アイヌ絵」では小樽市工藤氏所蔵として紹介されている 児玉コレクション 83.5×51.7
H10-0051-45-033	神祈図	平沢屏山 軸装 紙本着色 1幅 児玉コレクション 102.5×48.5
H10-0051-45-034	挨拶図	平沢屏山 軸装 紙本着色 1幅 印章:白文方印「九島野雀」(「奥深い沢の野に住む鶴」の意味) 児玉コレクション 61.5×44.0
H10-0051-45-035	母子図	平沢屏山 軸装 紙本着色 1幅 児玉コレクション 51.0×38.0
H10-0051-45-036	男性図	晃文 軸装 紙本着色 1936年(昭和11年) 1幅 児玉コレクション 140.0×51.0
H10-0051-45-037	男女狩猟図	軸装 紙本着色 1幅 シカを背負う男性の構図や女性の顔は雪好風であるが、技術的にはかなり劣る。狩猟を画題としたと思われるが、後ろの女性が漁猟用の銚を持っている点など不自然な点が多い 児玉コレクション 93.6×45.7
H10-0051-45-038	熊飼養図	軸装 紙本着色 1幅 千島春里の「アイヌ夫婦鼻飼育の図」(個人蔵)「アイヌ人物図」(天理大学附属天理図書館)(12幅中の1幅)に同一構図の子供を負った女性が描かれる。同様に「アイヌ人物図」(12幅中の1幅)に同一構図のヒグマも見える。軸裏面に「児玉博士全快祝のために送る 昭和十五年秋、馬場脩・朱文方印「馬場門外不出」とある通り、1940年(昭和15年)に馬場脩が児玉作左衛門の全快祝いとして贈ったもの 児玉コレクション 57.8×40.5
H10-0051-45-039	アイヌ絵巻	卷子本 紙本着色 1巻 木箱入 内容は「蝦夷国風図絵屏風」(公益財団法人アイヌ民族文化財団)や「蝦夷絵」(K-H13-0446)など小玉貞良の写 巻頭に「明治辛丑五月第一日曜日 鷗波逸史題」の序文、巻末に朱文方印「還謫齋図書記」があり、1901年(明治36年)に富田厚積(1836年～1907年 鷗波 越前福井藩士。幕末から明治時代の儒者)が手に入れたものと分かる。木箱側面に「アイヌ絵 竹屋ヨリ買」のラベルが貼付されており、竹屋旧蔵。竹屋(林長左衛門)は余市場所請負人 児玉コレクション 25.8×441.0
H10-0051-45-040	蝦夷国風図絵	卷子本 紙本着色 1巻 木箱入 内容は「蝦夷国風図絵屏風」など小玉貞良の写 児玉コレクション 17.3×623.5

資料番号	資料名	資料詳細(サイズは縦×横cm)
H10-0051-45-041	熊送図	春耕 卷子本 紙本着色 1895年(明治28年) 1巻 款記「乙未夏日 春耕写」 児玉コレクション 29.5×134.0
H10-0051-45-042	家族図	額装 紙本着色 1面 左の男性は「山越図」(H10-0051-45-031)に似る 児玉コレクション 109.0×37.5
H10-0051-45-043	蝦夷人物巻物	卷子本 紙本着色 1巻 木箱入 軸裏面・箱蓋表にラベル「蝦夷人物巻 明治三十年五月改 巻十七号 大塚益郎藏」 箱蓋表に「蝦夷人物巻物」の記載・紙片「蝦夷国風図絵と同じ」貼付 箱蓋裏「押木所藏」 大塚益郎は新潟県の実業家 内容は「蝦夷国風図絵屏風」など小玉貞良の写 児玉コレクション 35.0×725.0
H10-0051-45-044	蝦夷島奇観	卷子本 紙本着色 写本 1巻 紙箱入 児玉コレクション 27.0×731.5
H10-0051-45-045	蝦夷島奇観	卷子本 紙本着色 写本 1巻 紙箱(H10-0051-45-046と同箱)入 「蝦夷島奇観 粉本」(800276～800290・K-H13-0450-01-01～11)を元に描かれたものか(800264～800266・K-H13-0450-01-03・800275)に対応する場面はない 児玉コレクション 35.5×1460.5
H10-0051-45-046	蝦夷島奇観	卷子本 紙本着色 写本 1巻 紙箱(H10-0051-45-045と同箱)入 児玉コレクション 27.5×311.3
K-H13-0442	蝦夷島奇観	卷子本 紙本着色 1巻 紙箱入 内容は「蝦夷島奇観」等からの写 児玉コレクション 27.9×756.0
K-H13-0443-1 K-H13-0443-4	蝦夷島奇観(文政本)	大岡忠愨 卷子本 紙本着色 1825年(文政8年)写 2巻 紙箱入 款記「文政八乙酉年十一月 大岡忠愨写」 前半(K-H13-0443-1)の内容は「蝦夷島奇観」の膾炙脛部 児玉コレクション (K-H13-0443-1)29.4×348.0 (K-H13-0443-4)29.4×473.0
K-H13-0443-3 K-H13-0443-2	蝦夷島奇観(寛政年間幕府蝦夷風俗取調記)	卷子本 紙本着色 写 2巻 紙箱入 内容は「蝦夷島奇観」の写 児玉コレクション (K-H13-0443-3)31.0×384.0 (K-H13-0443-2)31.0×294.5
K-H13-0444	蝦夷島奇観	卷子本 紙本着色 写 1巻 木箱入 軸裏に朱文方印「余市 〇(ヤマジョウ)林改」・黒文方印「松前 〇(ヤマジョウ)竹屋 金銀不用」・朱文方印(判読できず)があり、松前の商人林家(竹屋、代々長左衛門を襲名、1820年(文政3年)からヨイチ場所請負)が所蔵していたことが分かる 内容は「蝦夷島奇観」の写 描写は平沢屏山による蝦夷島奇観(蝦夷風俗絵巻、大英博物館所蔵)に似る 児玉コレクション 29.5×1664.0
K-H13-0445	蝦夷風俗図	卷子本 紙本着色 写 1巻 木箱入 内容は「蝦夷絵」(K-H13-0446)の写(全く同じ) 巻末に「藩中山君玄容所倩人摸而藏之其原図蓋成於松前侯府」「寛政丁巳季冬 尾張鈴木朗識」等とあり、中山玄容(和清)(1765年～1829年、尾張藩士)の雇い人が、「松前侯府」本を写したことを記した、1797年(寛政9年)の鈴木辰(朗)(1764年～1837年、尾張の国学者)の識語がある 児玉コレクション 26.5×1338.5
K-H13-0446	蝦夷絵	小玉貞良 卷子本 紙本着色 1巻 木箱入 款記「竜斎貞良筆」 印章は白文方印「龍圓〇〇[2字判読不可]」「小玉氏」 各場面は「蝦夷風俗図」(K-H13-0445)に完全に一致することから、本図が写されたと考えられる。同資料の識文からすると松前侯府本か。表装は蝦夷錦 児玉コレクション 28.6×1373.0
(K-H13-0450-01 総括)	蝦夷島奇観・蝦夷国風図絵等粉本	一枚物 紙本墨書 21枚1組 「(函館某家蔵)(但し裏打あり) 平沢屏山の粉本 蝦夷島奇観 蝦夷国風図絵の模写を企てたもの」の紙ケース入 平沢屏山とされるが、箱は後からのものであり、箱書もフェルトペンによる 児玉コレクション
K-H13-0450-01-01	蝦夷島奇観 シトキ図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 「上巻 六 式寸」の記載あり。「スミ」「アイ」「アサキ」の色指定入り。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 児玉コレクション 27.1×37.9
K-H13-0450-01-02	蝦夷島奇観 列坐 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 「上巻 九 四寸」の記載あり。頭髮に「白」、衣服に「赤」「アサキ」等の色指定入り。「蝦夷島奇観 其二(列坐)」の粉本。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 児玉コレクション 27.0×37.7
K-H13-0450-01-03	[蝦夷島奇観] 踏舞図 粉本の一部	一枚物 紙本墨書 1枚 「上巻 十四 四寸」の記載があり。「蝦夷島奇観」の一部か。800266に連続する図。この結果から本資料を含む資料群と800266を含む資料群はもともと1つであったことがわかる 児玉コレクション 27.0×38.1
K-H13-0450-01-04	蝦夷島奇観 花矢を射る図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 六 五寸」の記載あり 人物の数等は異なるが、「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 児玉コレクション 26.8×38.0
K-H13-0450-01-05	蝦夷島奇観 挟殺の図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 七 式寸」の記載あり。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 児玉コレクション 26.9×38.2
K-H13-0450-01-06	蝦夷島奇観 カマイ・ノミ図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 八 六寸」の記載あり。人物の数は異なるが、「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 児玉コレクション 26.9×38.2
K-H13-0450-01-07	蝦夷島奇観 酒宴図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 九」の記載あり。行器(シントコ)が描かれる点など細部は異なるが、「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 児玉コレクション 26.9×37.6
K-H13-0450-01-08	蝦夷島奇観 西夷地居家図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 「下巻 十一 式寸」の記載あり。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 児玉コレクション 26.8×38.1
K-H13-0450-01-09	蝦夷島奇観 家居宝械図(家屋内部) 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 細部で異なる点はあるが、「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 児玉コレクション 27.0×38.1
K-H13-0450-01-10	蝦夷島奇観 マチコル図 粉本	一枚物 紙本墨書(一部朱塗り) 1枚 「下巻 十三 五寸」の記載あり。「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 児玉コレクション 27.0×27.0
K-H13-0450-01-11	蝦夷島奇観 おっとせいに鉢を打ち込む図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 「蝦夷島奇観」(H10-0051-45-045)の下絵か 児玉コレクション 27.0×38.0
K-H13-0450-01-12	蝦夷国漁場風俗図巻(オムシャ図) 粉本	一枚物(3枚継) 紙本墨書 1枚 小玉貞良「蝦夷国漁場風俗図巻」(南オーストラリア州立美術館)に似る 児玉コレクション 27.5×114.7
K-H13-0450-02-01	蝦夷国風図絵(熊狩図) 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 小玉貞良の「蝦夷国風図絵」の系統に似る 児玉コレクション 28.0×39.9
K-H13-0450-02-02	蝦夷国漁場風俗図巻(地曳き網図) 粉本	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 小玉貞良「蝦夷国漁場風俗図巻」(南オーストラリア州立美術館)に似る 児玉コレクション 28.0×77.4

資料番号	資料名	資料詳細(サイズは縦×横cm)
K-H13-0450-03	蝦夷国漁場風俗図巻(荷渡図) 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 「十四」の記載あり 小玉貞良「蝦夷国漁場風俗図巻」(南オーストラリア州立美術館)に似る 児玉コレクション 30.8×46.5
K-H13-0450-04	操船図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 左の男性は小玉貞良「蝦夷国漁場風俗図巻」(南オーストラリア州立美術館)に似る 児玉コレクション 27.2×38.7
K-H13-0450-05	地曳き網図 粉本	一枚物(4枚継) 紙本墨書 1枚 樹木の配置などは異なるが、小玉貞良「蝦夷国漁場風俗図巻」に似る。波の描き方は貞良ではなく屏山風 児玉コレクション 39.3×59.7
K-H13-0450-06	宝物検分図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 「四口 夷宝ヲ見トルゾ」 顔立ちは小玉貞良風 児玉コレクション 29.5×42.0
K-H13-0450-07	男女出猟図 粉本	一枚物(5枚継) 紙本墨書 1枚 「男女出漁図 粉本」(800263)、妻沼コレクション(北海道博物館 収蔵番号126271)はほぼ同じ構図である。「男女出漁図 粉本」(800262)とも同系統の図。雪好模本か 児玉コレクション 82.0×48.7
K-H13-0450-08	荷造図 粉本	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 構図は「荷造図 粉本」(K-H13-0450-09)にも似る。サイズから描画段階の違うものか。顔立ちは雪好風 児玉コレクション 55.5×39.7
K-H13-0450-09	荷造図 粉本	一枚物(2枚継) 紙本墨書 1枚 天地を示す「上」の記載、裏面に絵の発注者とも見られる「ソウヤ 請負人 藤野喜兵衛」「イシカリ請負人 阿部屋 傳治郎」の記載がある。同様の記載は「男女出猟図 粉本」(800262)にも見られ、本資料群と同資料を含む資料群(800262～800290)は元々1つの資料群であったと考えられる。構図は「荷造図 粉本」(K-H13-0450-08)にも似る。サイズから描画段階の違うものか。顔立ちは雪好風 児玉コレクション 79.2×28.8
H16-0029	狩猟帰路図	倉田松濤 額装 紙本着色 明治～大正 1面 100.0×38.0
H29-0029	ウイマム図絵馬	平沢屏山 絵馬 紙本着色 板張り 額装 1面 函館市中央図書館から移管。劣化が激しく文字等は判読できなが、「市立函館図書館蔵 郷土資料分類目録」562左には「オムシヤ之図」(正しくはウイマム図)として、新潟白山神社へ国領[米屋]栄七が奉納した絵馬とある(同前「郷土資料分類目録」、栄七は平七の誤りか(「アイヌ絵」越崎宗一))。国領平七は函館弁天町の近江商人で、1818年(文政元年)箱館に移り、次第に事業を拡大、呉服太物その他種々の雑貨を売買していた(「函館市史」通説編第1巻)。同前越崎の著作では、平七の「手船金晴丸船中で安政年間の作」とされる 107×173.5
H29-0031	魚漁図屏風	屏風 紙本墨画着色 2曲1隻 函館市中央図書館から移管。「市立函館図書館蔵 郷土資料分類目録」553右掲載 123.3×107.5
S57-0079	遊撃隊起終録并南蝦夷戦争記 附録 戦地写生図	玉置弥五左衛門 折本 49折 1冊 巻末にアイヌ絵がある。アイヌの親子が描かれ、「女子夫ヲ持時ハロニ入墨ヲシ手ニモ亦墨ヲ入ル則知図」とある。玉置弥五左衛門(1844年～没年不詳)は、岡崎藩士で遊撃隊隊士、旧幕府軍に合流し、箱館戦争にも参加した。同じ構図が「遊戦友姿絵」(S63-0020)にある 27.1×20.0
S63-0020	戦友姿絵	中島登 卷子本 紙本着色 1幅 木箱入 新撰組の隊士中島登(のぼり)が箱館戦争後の弁天台場拘禁中に描いたもの。新撰組隊士を中心とした志士たちの姿に追慕のこぼりが添えられている。巻末にアイヌ絵がある。同図は「遊撃隊起終録并南蝦夷戦争記 附録 戦地写生図」(S57-0079)に同じ 35.0×838.5
R01-0003-001	おひょう漁図 粉本	一枚物 紙本墨書 1枚 児玉コレクション 一部輪郭線朱書き、人物は表裏両面から書かれる 鶴図粉本(R01-0003-002、一枚物 紙本墨書 1枚)附属か 32.0×68.0cm
R01-0003-003	毛人三傑之図	鷹部屋福平 軸装(仮表装) 1939年(昭和14年) 絹本着色 1幅 児玉コレクション 「峯維昭和己卯夏日 児玉学兄来学十年記念 愛奴三傑之図取乞 学兄清監指正 福平生」 夷酋列像のうち、左からイニカリ(乙唸葛律)、マウタラケ(麻烏太蠟濛)、ノチクサ(訥室孤殺)の3人を模写したもの 鷹部屋福平(たかべや ふくへい、1893～1975)は、日本の工学者、アイヌ文化研究者 103.0×91.0cm
R01-0003-004	家族図	軸装 絹本着色 1幅 児玉コレクション 102.7×34.5cm
(館蔵)	港まつりアイヌ絵画展覧会ポスター	市立函館図書館 ポスター 紙製 1936年(昭和11年) 1枚 アイヌ絵画展覧会にあわせて制作されたもので、夷酋列像のうち「イコトイ」(現在は函館市中央図書館蔵)が描かれる。当時の市立函館図書館長岡田健蔵が図書館員大垣友雄(署名:「ともを」)に模写させた。アイヌ絵収集の現状を憂い、その宣伝のため、紙質を吟味した「豪華版」として制作された 88.2×59.5

蝦夷島奇観の各場面の名称は、『「蝦夷島奇観」各本の内容対象比較表」東京国立博物館本によった。(佐々木利和「アイヌ絵誌の研究」120頁～123頁)

資料名は本一覽作製に合わせて、画題から新たにつけたものもあり、資料登録上の名称(登録資料名)と一致しない。

本一覽は、市立函館博物館が所蔵する「アイヌ絵」のうち、掛け軸や卷子本、額装資料などを基本とし、「蝦夷志 写本」「三国通覧図説 写本」など全ての和綴本、「北海道鯨漁概況之図」などの浮世絵等は掲載したのではない。

※ 児玉コレクション 児玉作左衛門(1895年～1970年)収集によるコレクション。児玉は、北海道大学医学部教授として研究・教育に携わる一方、アイヌ関係資料の海外流出などの散逸を恐れ、資料を収集した。特にアイヌの人々の衣服や首飾りなどの服飾品は、代表的な資料で、アイヌ絵も多数含まれる。児玉の死後、コレクションは遺族によって市立函館博物館と白老のアイヌ民族博物館(当時)に分けて寄託、後に寄贈となった。

※ 花光コレクション 花光春之助(1893年～1980年)収集によるコレクション。花光は、1927年(昭和2年)頃から金森百貨店事務長や支配人を歴任、郷土文化の催事を開催するうちに、地域の歴史に関心を抱くようになり、美術工芸品を収集した。函館市議会議員や教育委員のほか、博物館の運営委員などの役職も務めた。1966年(昭和41年)、資料は博物館本館の開館に際し、一括寄贈された。アイヌ絵のほか、蠣崎波響の絵画など函館市指定有形文化財が多数含まれている。

※ 能登川コレクション 能登川隆(1902年～1958年)収集によるコレクション。能登川は、在野の考古学研究者で、大正期から昭和30年頃にかけて、独学で函館市内やその周辺の遺跡調査、土器、石器などを収集した。収集資料は、学術的に貴重なものが多く、注目されていたが、1959年(昭和34年)、能登川隆の死後、遺族から一括博物館に寄贈された。文身研究の一環で収集したと思われるアイヌ絵が2点含まれている。

市立函館博物館 研究紀要 第30号

編集・発行 市立函館博物館

040-0044 函館市青柳町17-1

TEL 0138-23-5480 FAX 0138-23-0831

HP <http://hakohaku.com>

E-mail hakohaku@city.hakodate.hokkaido.jp

発行日 令和2(2020)年3月31日